

318

510



始



318-570



力

原田大尉

東京文林堂書院發行



318-570

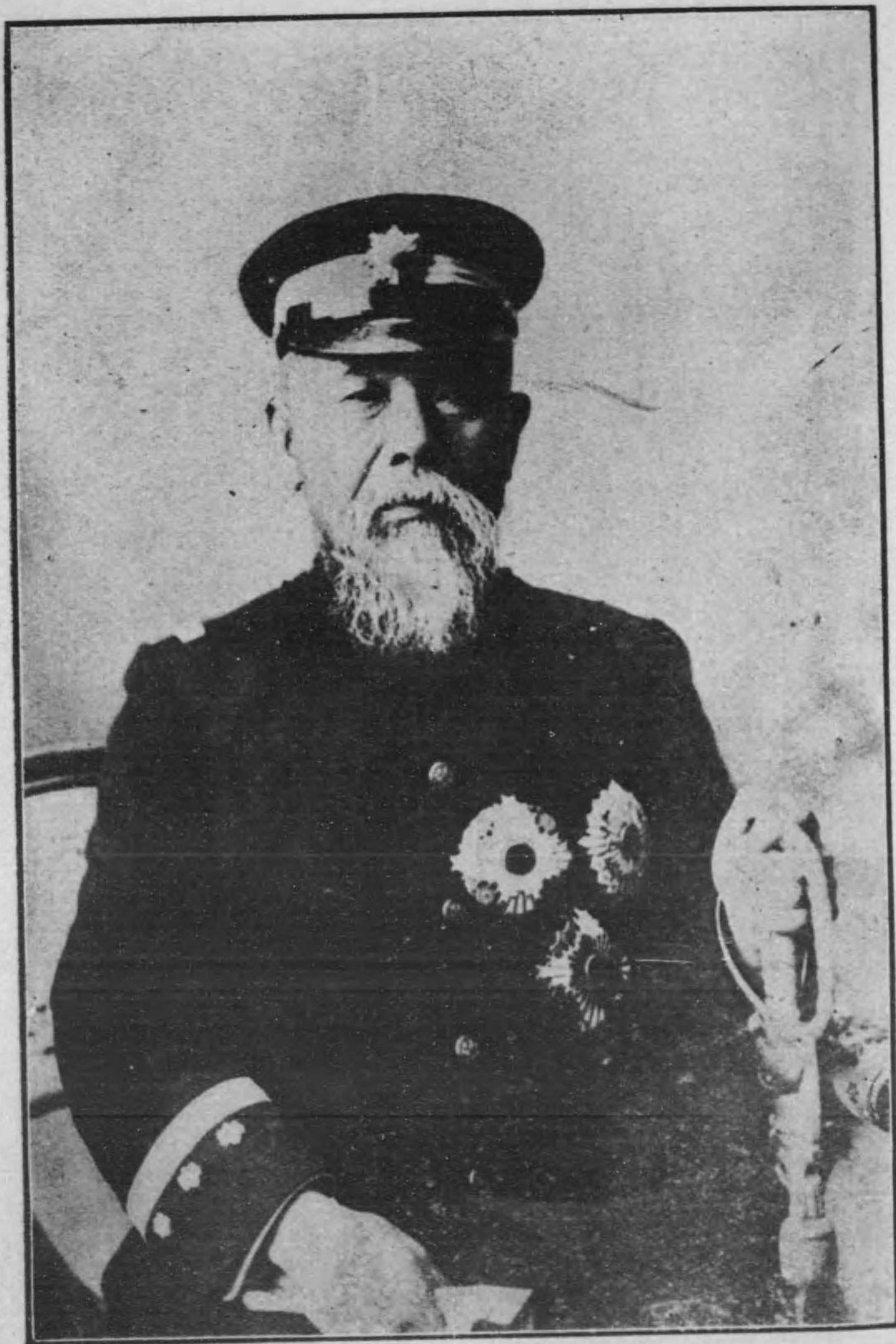




下關郎太堅子金 爵子



郷トルエザール



下關文博藤伊 爵公

自序

人間の生存競争にもさうであるが、戦争には殊に三つのことが大切である。其一つは機先、其一は優越、他の一つは持久である。機先とは即ち先手を打つことで、優越とは物質的にも精神的にも相手にすぐれることで、持久とはその優越を永くもちつゞけることである。ところが日本軍が敵軍に對する場合を想像すると、第一の優越と第三の持久とに幾分かの弱點を有して居る。若しも三の大切な要素中で其の一若くは二を缺く場合には、他の要素によつてこれを補ふ外は無い、即ち日本軍の爲めには第一の場合の機

先を確實に獲取するといふことに歸一するのである。攻撃精神もこの機先から出て来る。ところが、吾人は敵を見るに常に我と同等若くは其以上であるとして居らなければならぬ。即ち機先を制する手並に於ても亦我と同等若くは其以上のものと見る必要があるたゞ、これを掴み得る唯一の方法は、上元帥より下一卒に至るまで、機先の眞の意を理解することに存する。堅忍持久、確固不拔奮勵努力——これは唯戰鬪中にのみ必要といふものでなく、敵に機先を制する必要から来る其等の必要は非常なものである、爲さんと欲することを爲し得るの状態にあること、これが機先であつて、若しも敵の爲めに爲さんと欲することを爲し得ざるに至れば

其れは明らかに敗亡の第一歩である。

名けて本書を奮闘努力といふ、其の意味は勝利の爲めには如何なる事をも爲すといふの義であつて、大義親を滅するといふこと、同一の意である。戦争に限らず萬事に勝利を占めんが爲には常にこの用意を缺いてはならない。其處に本書の狙ひ點が存する。

大正十二年五月卅日 東都九段に於て

著 者 識

奮闘努力

目次

第一章 異人種戦争	【一—五二】
一、北方の砲聲	一
二、第一線	五
三、這ひ込む大男	一〇
四、争奪目標	一五
五、初陣の瞬間	二〇
六、代表的戦争	二五

目次

七、激戦の後に……………三〇

八、俘虜の物語……………三五

九、弱國の悲惨……………四一

一〇、後の記念日……………四六

第二章 戦争の背面……………【五二—一九】

一、發端……………五二

二、成敗利鈍は問はず……………(其一)……………五四

三、成敗利鈍は問はず……………(其二)……………六〇

四、恩賜の御菓子……………(其一)……………六五

五、恩賜の御菓子……………(其二)……………七〇

六、五分五分か六分四分か……………七四

七、四面楚歌の聲……………八〇

八、White House……………(白聖館)……………八六

九、所謂武士道……………九二

一〇、連戦連勝……………九八

一一、猛獸の皮……………一〇四

一二、講和の斡旋……………一〇九

一三、日本の今後の使命……………一一五

第三章 猛分隊長……………【一一〇—一二三】

目次

一、赴任の途中……………一二〇

二、吾はこれを知らず……………一二六

三、小哨長……………一三二

- 四、責任の歸する處……………一四〇
- 五、不思議な無罪……………一四五
- 六、未熟な小隊長…(其一)…一五〇
- 七、未熟な小隊長…(其二)…一五五
- 八、射撃の妙手……………一六〇
- 九、馬賊の眼玉…(其一)…一六六
- 一〇、馬賊の眼玉…(其二)…一七二
- 一一、退却中の事件……………一七六
- 一二、混戦格闘……………一八一
- 一三、四分五裂の退却……………一八八
- 一四、青葉隠れ……………一九三
- 一五、双頬を流るゝ涙……………一九八

第四章 機先的勝利……………【二〇四—二三六】

- 一、明日の身の上……………二〇四
- 二、不時呼集……………二一〇
- 三、混成支隊……………二一五
- 四、一種の演劇……………二二二
- 五、拂曉の濃霧……………二二七
- 六、勝利の爲めに……………二三三

第五章 墳墓の地……………【二三七—二五七】

- 一、絶體絶命の號令……………二三七
- 二、犠牲心を採る……………二四二

三、夢か現か幻か……………二四七

四、最後の血の一滴……………二五二

目次 (をばり)

奮闘努力

原田大尉 著



第三章 異人種戦争

北方の砲聲

つまりそのことだつた。

生れて始めて他人の仲に入つて、他人と一緒に公務に服するとき、自分の身体はよくこれに堪へ得るであらうか、少くも人並に後れずに何事もはかどるだらうか、それ

で二年間立派につとまつて、それで恥づかしからぬお土産を身につけて我が家に歸へれるだらうか、それは徴兵に合格した男子の一番最初に浮べる心持であらう。けれど、一度國交が斷絶して日本が或る國と戦争を始め、陸軍も海軍も動員令を受けて出征の準備をする、いよいよ出發となる、何千噸といふ運送船が港に黒煙を吐きつゝ、軍隊の乗り込むのを待つて居る光景を、戦時武装して埠頭からそれを眺めるとき、將校と云はず下士といはず兵卒と云はず、一番最初にその頭に強く衝いて來るものは何か。

『實際實弾が飛んで來る場處へ始めて出た時の心持はどうであらう。本當の生きた人間を目標として照準するときの氣持はどうであらうか、自分の腕で本當に敵が斃せるかどうか、突撃のときは……。』

つまりそのことだつた。

一晚は少くもこの事を考へるものだ。其の外にも郷里の事やら、我が亡き後の事や

ら、種々の事も考へなければなるまいが、そんなことは仕うでもよい。今日の前に運送船を望見しながら自分の背後に残されることを何と考へたつて、それが何にならう。そんなことより「始めての鐵砲弾」を考へた方が軍人的だ、少くとも日本の軍人的である。

私は一昨年から重大な病氣にとりつかれて今にも死にさうだつた。が、まだ生命があつたものと見えて此頃漸く治ほつた。治ほつて見ると、元氣だつた以前の私的病氣に對する解釋が誤つて居たことを始めて知つた。しかし今更元氣だつた時代のことを何と羨しがつても、それは最早後の祭だ、それよりか病氣から悟り得た結論を實行して今後を處して行くより外は無いと思つて居る。

戦時武装をして港に出ながら後方の事を考へるのは、私が病氣以前の事を考へると同じ不覺で、今更それは無益である。そこで、出征軍人は始めて第一の結論を得ることになる。その結論といふのは、

『自分といふ一人がどれだけ戦場を有効ならしめるか、實際自分は人並に後れぬ丈けに生を此世に享けて居るかどうか、それを見て死ぬなら死ぬ、生きるなら生きる。』
つまりその事だ。

さて前提はこの位にして、私が始めて戦場へ出たとき、實はまだ陸軍士官學校を卒業したばかりの青侍で、年齢は少く、経験はなく、それで一小隊を率ゐて、果して有効なる動作が出来るであらうか、實彈の來る中で……と考へると、甚だ不安に堪へなかつた。

いよく戦場に出た。それは明治三十八年二月の初め頃、運送船が私共四百八十名を南尖といふ濱に上陸させて呉れて、第一歩を滿洲の赤土の上に踏んだとき、私は責任のある身でありながら、永き航海と船暈の爲めとでフラク／＼して居た。

『只今我第一線は交戦中であるから、その補充部隊は一刻も早く第一線に到着して、所屬隊に合しなくてはならぬ。』

といふ命令に接して、毎日々々十里以上の行軍を續けることになつた。

漸く上陸したばかりで一日位休養してから行軍を起すなら、氣分も大に沈着くのであらうけれど、今はそんな氣樂をいふて居る場合ではない、第一線は奉天といふ敵の根據地を目懸けて一齊に攻撃を起して居る。

三日目の朝四百八十名の補充部隊は遙か北方に當つて遠雷の如き砲聲を聞き始めた。

二 第一線

砲聲は絶間なく行先遙かなる山の彼方から起つて居る、いろ／＼のことから計算するにどうしてもまだ五六里はあるだらう。

平時の機動演習などでは、長い行軍で大に疲勞して居ても、砲聲が聞えだすと疲れ足も大に軽くなるものだ、何となく勇壯で嬉れしくなる。が、今熾んな砲聲を耳に

して、行軍の状態は一の變化を來した。それは實に不愉快な變化だつた。落伍者が出來始めた。種々病苦を訴へるものが出始めた。無理もない、旅順の戦闘で負傷して内地へ後送せられ、まだ十分に治癒して居ないものが、補充員不足の爲め多少跛をひき乍ら今此の四百八十名の中に加はつて居る。又中には二ヶ月しか教育を受けぬ補充兵役の者も居る。この事は詳しく述べることは憚りがあるからこの位にして、只茲に一言誠に不本意だつたといふことを附加へて置く。

五六里の距離から聞くやうな見當の砲聲は四日目にも同じことだつた、五日の朝になつても少しも近づいた様子が無い。此方は十里以上行軍するから、もう第一線へ追及して居なければならぬ筈なのに、少しも近づいたやうな様子が無い。それは後に知つたことだが第一線は着々勝利を得て追撃又追撃一日に十里以上も前進して居るのだつた、だから何日たつても距離は同じことだ。

それでも六日目になつたら、砲聲が間近くなつて來た、お午ごろになると、擔架に

載せられた負傷者が陸續として退がつて來る、何れも蒼い顔をして目を瞑ぶつて、うん／＼呻いて居る、血が擔架を染めて居る。

『第一線はエライ激戦だ、損害も随分ある、早くいつてやつて呉れ。』と輕傷者はいつたりした。

落伍者は益々多くなる、砲聲は直ぐ前の高地からあがるやうだ。それでも小銃の音が聞えぬ所を見ると、まだ一里以上はたしかにある。

このときの氣持はどうか。

この四百餘名が第一線に到着する、直ちに各中隊に分配せられる、中隊長や小隊長若くは分隊長の名前も記憶へぬ裡に戦死と來れば世話はない。

夕方に第一線に着いた。そこは聯隊本部のある谷地で、顔中鬚一ぱいの聯隊長は双眼鏡を胸にかけて直ぐ上の高地にあつた。副官は變な長靴を穿いて、帳面を片手に此補充員を各中隊に分配した。私は即刻旗手を命ぜられた。も少し前前の旗手は腹を打

たれて戦死したので、つまり私がその後任者なのだ。死んだ者の後釜に据ゑられるのが縁喜が悪いといふならとても戦争は出来るものでない。聯隊が出征以來旗手は私にて七人目である。

今日は我師團が敵の最後の據點たる最高地點を占領したので、只今は一時休みの姿であるが、夜になると或は敵が逆襲をかけるかも知れないといふので、最高地點へは聯隊の豫備隊が増加されることになつた。そこには機關銃が二挺と歩兵が三中隊配備せられてあつたが、日の暮れると共に銃聲も止み砲聲も止んだ。私はその高地の南麓で天幕の中に這入つて第一線に到着した第一日の露營の夢を結ぶことゝなつた。いつの間にかやら實彈の飛んで來るときの氣持はどんなものかといふ妙な感じの事を忘れて仕舞つて。

天幕は兵卒六名と旗手の私とを容れるやうに作られてあつた。すぐ右隣には聯隊長と副官との天幕があつて、軍旗はその方へ置かれてあつた、私は軍旗衛兵を指揮し

て今其の天幕内に焚火を圍んで、煙草を喫つたり辨當を食つたり、小聲で談話を交へたりした。小さな蠟燭が點けてはあるが、隅々は暗くて日誌を書くことすらむづかしひ有様だ、それもさういふ必要がなければ節約する爲めに消すことにした。土民の家から徴發して來た黍殻を焚くのであるが、すぐ燃え盡きて、燠りもろくく採れない、その上狭い天幕内の事で燻ぶること夥しい、泣くのやら燻むいのやらで涙が出る、どつちが本當だかわからなかつた。

それで明日の拂曉に敵から逆襲があるかも知れぬといふので、高地の上の人達は天幕どころの騒ではない、寒い夜空を煙草一服喫まずに戦闘準備をして居る。高地の北の斜面は一面の残雪で、南の斜面は消えて黒い、それが一面に連なつて居るので、何だかそれだけの景色を見ても異域に在るといふ感じが強く胸に響いて來る。

うつら／＼と假眠が始まつた。私も別に疲れたとは思はないが、いつしか白河夜舟を漕ぎ始めた。衛兵の交代は一時間だからそれさへ誤らなければよい譯であるが、始

めて第一線に到着して眠れる位の餘裕があれば、さう大したことでも無いと思つた。明日は又どんな大行軍をしなければならぬやら、それを思ふと眠れる丈けは眠つて置かう、食ひたい丈けは食つて置かうと妙な事を慾張つた。それでも時々前方の歩哨線で銃聲がするにすぐ目が醒めるから笑止だ。

三 這ひ込む大男

私を入れて七人の者が天幕の中央の一點に向つて、二本の脚を投げ出して坐ると、十四本の脚が一の菊花の形を作る、花の中心が即ち焚火である。蠟燭の火は消し一同は假眠をして居る、私もいつしかその仲間に入つた。何だか變な夢を見たと思つて不圖目が醒めた、寒い、身顫ひしながら黍殻をくべようとしたとき、直ぐ私の後方天幕の裾の方から、人がゴソリ／＼と這入つて焚火の方へ出て来る様子だ、交代兵が小便にでも行つて歸つて來たのかと思つたので、別に氣にも留めなかつたが、そ

の大男はいつしか私の左隣に割り込んで兩脚を投げ出さうとして居る、その時同時に黍殻はバツと音を立て、燃えさかつた、急に幕舎内は明るくなつて、私は今その大男の顔を見て驚いた。

「やッ、皆起きて呉れッ、早く火を點けるッ。」

それは私が言ひ得た全部の言葉であつた。

黍殻の火は既に消えた、此の既に消えた間に私は全身の魂と力とを擧げて其男に組み付いて居たのである。荒い息は双方から上つた。

火は間もなく點けられた。

見ると、今私の組み付いて居る男はそれは敵の軍人、長い鬚を顔一面に生やして恐ろしい大きな眼玉をしたデブ／＼に肥えた偉丈夫であつた。

私が三つ目の拳固を彼の横面に打つ付けたとき、他の兵卒が寄つてたかつて彼を振り倒した、天幕は搖ぎ焚火は蹴散らされた。灰神樂を上げて濛々と立昇る塵埃の中で

もういつの間にやら彼の男は後手に振ち上げられ、鼻から赤い血をだら／＼流して居た。

彼には抵抗の意志なし。

それを断定するまでには餘り長い時間ではなかつた。で私は

『もう歐ぐるのは止めよ。』

といった。一同はそれに従つて止めた。

つまり捕虜だ。捕虜にしては餘りに變な捕虜で、それを漢文的にいふなら『窮鳥懷に入る』とも云つて差支ひない捕虜なんだ。懷に入つて來たものは取らぬといふのが武士道ださうだが、獨斷を以て放つてやるわけには行かぬ、とにかく彼が故意に此幕内に這ひ込んだ眞意が明らかになければならぬ。軍旗を奪ひに來たのか又は聯隊長を殺しに來たのか、又は私を……

そこで、訊問が始まつた。始まつたには始まつたが私は露西亞語は一字も知らな

い。若しも彼にして獨逸語か若くは英語か又は支那語が出来るなら、何とか屁の字なりに訊問の目的を達することを得るかも知れない。

私は始めて敵の軍人を殴つた、手が痛くなるほど殴つたが他人を殴ぐるのもみやすいことではない。殴ぐつてやつた勝利的快感よりも組み付いたとき摺り付けられた山荒のやうな面癩の不快感がよりひどかつた。しかし私は怪やしげな獨逸語で、

『貴様は獨逸語か英語か又は支那語が出来るか』と問ふた。

『はい、英語なら少しは出來ます』

と彼は獨逸語を以て明瞭に答へた。すれば彼は英語を知ると同時に獨逸語も知つて居るのだ。

情ないことに、日本と露西亞との軍人が、各々其の自國の言語を以てすることが出來ないで、第三國の言葉を以て用を辨ぜなければならぬとは底事ぞ。

私は今日に至りしみるこの事を口惜しく思ふ、日本人は日本人の言語を用ふべし

だ、日本に在りながら外國語を以て外國人に接するといふのは不見識も甚しい。外國人をして日本に在らば絶對に日本語を語らしめよ、決して彼等の言語を日本内地に蔓こらしむる勿れ。この點に於ては外交官や政治家達から既に不見識の手本を示されて居る、彼等をして日本語を學ばしめよ。日本人は外國語を學ぶ必要がある、しかし其の使用すべき場所を辨へなければならぬ、英語が何か佛語が何か、獨語や露語や伊語が何するものぞ、我は日本人なり、日本語は少くも亞細亞の中心語でなければならぬ。

思はず物語が岐路に入つたが、とにかく不見識な外國語を以て私は彼と應接した。

彼は其名を「ウイシコフ」といひ、歩兵の下士であつて、少年時代を英國と獨逸で送つたこと、そして彼の生れ故郷は波蘭の首都「ワルシャワ」であることがわかつた。

今夜この天幕内に這入つた理由は、彼は今日の激戦で所屬隊の退却に遅れ、この下の地隙の中に匿かれて居たが、到底日本軍の監視をくぐつて所屬隊に復歸する見込は立たず、其の上に今夜の寒さと空腹に堪へ兼ねて、男らしくないことではあるが、降参の爲め出かけたのである。決して害心はない、何事にも誠實に服従すると誓つた、胸に十字を切つて私にそれを誓つた。

『よし。』

と私は彼を許してやつた。

彼は次の日迄天幕内にあつた。

四 争奪目標

逆襲!

誰もさう呼んだものは無い。呼んだ者は無いが、夜はもう東天が紅くなつて居る。

高地には激しい銃聲殊に機關銃の連べ打ちが恐ろしい程よく續いて居る。叫ぶ聲も聞えて来る、暗い中を人が彼方此方へ馳せしきる、聯隊長と副官は天幕の外に現はれる。私は手に軍旗を渡される、護衛の一中隊は一人の咳さへするものなく谷間に坐つて命令を待つて居る。

『逆襲して来たんだ、そりや君ひどいことだぜ、どうしても一ヶ師團位の兵力だよ。この高地を取れちや敵も口惜しからうからな。』

と中隊長は今高地の上からそんなことを話しながら降りて来た。

續いて南方の高地に露營した我が山砲大隊が、猛烈な砲撃を始めた。彈丸は何處で破裂するかと思つたら例の最高地點だ。

『我軍を撃たなきや宜いかなア。』

みんなそれを心配して居る。

『我軍だらうが敵だらうが一緒にやつつけるんだ、戦争はその意氣さ、それでなきや

やれるものぢや無うよ。』

中隊長はさういつて、巻煙草に火をつけた。

戦闘は益々激しくなつた。突撃のやうな喊聲が上る、小銃の音が谷間に和してゴクゴク一緒になつて仕舞つた。

『第〇〇中隊前へ。』

この命令は十分間もするとやつて来た。私も護衛中隊と共にとろく危ない高地上に上らなければならぬことゝなつた。

『たゞ前へぢやわからんよ、その高地へ行くのかい、もう少し明瞭に云へ明瞭に。』

と中隊長は傳令兵を叱り付けた。

今一息で第一線に増加しようとしたとき、敵の大集團は最先に軍旗を押し立て、もう高地を奪ひ返へして了つた。我三中隊と機關銃はどうなつたかと思つて見ると、敵線の直ぐ前方十米突ばかりの斜面にかじり付いて居る、が、それだけはわかつたが、機關

銃二挺は何處へ行つたやら音もせぬ、姿も見えぬ。

五分間の後私共は全部後方一昨日の陣地に退却した。機關銃二挺は敵の手に入つたことは云ふまでも無い。守備隊長たりし大井少佐は戦死した、彼は胸に「ブリズム」の双眼鏡をかけて居たが一彈來つてそれに命中し、アルミニウムの部分が少佐の肋骨内に滅入りこんだといふことだつた。

私は初めて彈丸を見た、初めて實戰場裡に踏み出した。内地の港で考へたことは全然零だ。つまり何の氣持も起らない、つひ今の通りの事に遭つた丈けだつた。恐ろしいとも思はなかつたが、面白いとは勿論思はない。機關銃二挺を失つたこと丈けで、敵が幾分か勝利を得たこと丈けを意識した。

逆襲！

誰もそんなことを呼んだものは無い。呼んだ者のあるときにはもう逆襲は済んで日は高く昇つて居た。負傷者が地隙の中に一杯だつた。

それが敗戦だらうか。例の中隊長はいつた、「取つたり取られたり又取つたりするんだよ、取られたり取られたりが多くなる露助さんのやうになるんだ、取つたり取られたり又取つたり……さかういふ按配式に取つたりが多くなれば日本帝國萬歳だ。内地の先生方は只今のやうな逆襲さへも敗戦といふだらうかね、全く兵隊さんもつらいことだよ。」

中隊長はもう場馴れしたとでも云ふものか、戦ひを遊びのやうに考へて御座るらし

誰も失望して居るものは無い。失望したものは昨夜捕へた「ウイシコフ」位の者だらう、彼は恐らく天幕と共に又所屬隊へ歸つたことだらう、忌々しい、あんなことならあのとさ殿ぐり殺して置けばよかつた。

最高地には間もなく敵の砲兵が現はれて、盛んに我陣地を砲撃し始めた。

『明朝どうしても取つてやらうぞ。』

聯隊長は副官を顧みてそんなことをいつた。

五 初陣の一瞬間

ところが今朝四時頃から七時頃迄、僅か三時間の裡に戦死が三十七名と負傷者が百四十三名出来た。たつた歩兵の三中隊それも度々の戦鬪で合計四百人ばかりの人員からそれ丈けの死傷者が出来たのだから、随分大きな損害と謂ふことが出来る。それに機關銃を二挺とられ、大隊長を失ひ、おまけに一度占領した高地迄失つたのだから、この局に當つた将卒は世界中で一番激戦をしたと思ふのも無理は無い。

けれど、たかが一高地の争奪だ、たとへこれを取つたにしろ奪られたにしろ、日露戦争に於ける兩交戦國の勝敗には大した關係はない。が、散兵線に居る一人々々はみんな國家の一大事だと承知して、猛烈果敢に戦つたのだ。かう考へるとこんなくだらない一局地の争奪に大隊の三分の二を失ふてまでやる必要もないやうに思へる。

が、若しもさう考へる人が居るなら、それは大きな誤解だ。戦争は煉瓦家を建てると同じ事で、小さな四角な一つの煉瓦を組み合せ積み上げて七階八階の高荘な家が出来上るのだ、一個足りなくても工合が悪い。今最高地點を失つたのは煉瓦の一枚を失つたことになる、これを持つて来て組み立てなければ上の層の煉瓦を積みことは出来ない。

されば、この犠牲は決して無意味のものではなかつた、只不幸にして一枚の煉瓦——其れも血と汗とで持つて来たものを、大風が来て崩したやうなものだ。それを積み換へるには又相當な努力が必要になる。

『明日は取つてやらう。』

と聯隊長が言つたのは、つまりこの事なんだ。

『とつたり取られたり又取つたり……。』

と豫備隊の中隊長がいつたのもこのことだ。

戦争の煉瓦家屋は一枚確實に積むのに、血と生命を必要とするのだ。それを御存知なしに弱い強いといつて太平樂を並べるのは並べるものが間違つて居る。それは私も心得て居たが、私はその際ひしろ一人の捕虜が惜しかつた。彼奴は平氣な顔をして逃げたのか、又はどうしたのか、どうも彼奴に心を引かれて仕方が無い。彼奴の生れは露西亞土着でなくて波蘭だといつた、だから降参しても大した耻辱とは思はなかつたであらう。

戦闘後の忙がはしさて私は他の大隊長の處へ傳令に行つたり、命令を書いたり、副官の手傳をしたりした。恰度午後二時頃の事だつた。私が熱心に日誌を書いて居ると、天幕の脇でドエライ爆音がして土煙は幕の中まで飛び込んだ。人々はアレ／＼と叫んでゐる、どんなことかと出て見たら、敵の一砲弾が着發して其處に勤務をして居た傳令兵二名を倒ふし、小行李駄馬の頭を打ち殺した。

私は始めて敵弾の中に入つたやうな氣になつた。まだ他に怪我人が出来たかも知れ

ないが、そんなことを聞いて見たいと思はない。思はないのではない嫌ひなんだ。

『あゝ、貴様昨日来たさうだな、来る早々かういふ始末で悲觀しなかつたかい。』

山本といふ友人の少尉が偶然やつて来て、そんなことをいつた。

『御機嫌よろしう、これから君達の仲間入りだよよろしくお頼み申すよ。』

と私は答へた。

『時に君、今度君達が引張つて来た補充兵と來ると随分ひどいぜ、先刻乃公が一分隊連れて斥候に出たと思へ……。』

山本は次のやうな物語をした。

——一つの高地の稜線に顔を出したと思ふと、敵の大兵團が直ぐ其の高地の北麓に集合中だ。驚かうことか驚くまいことか、山本はすぐこれを本隊に報告しなければならぬので、連れて行つた分隊の五六名を監視の爲めに残して置いて、自分は山の陰で報告を書いた。書いて了つたから、も少し敵の方を見ようと顔を上げると、監視兵は

一名も居らぬ。どうしたのかと四邊を見たら、先生恐怖がついたか無断で高地をスタ
ク降つて御座る。つまり臆病だつたのであらう——
『實際乃公もこれには驚いた。なんぼなんでも逃げ出しはすまいと思つたが。實際逃
げ出したから情けない。』
彼はさういつた。

それは昨日つれて来た二ヶ月教育の補充兵だつた。彼等は第一線に到着したと思ふ
と翌曉はあの通りの大逆襲、それでは逆もやりきれぬと思つたのか、少尉に引かれて
斥候に出たまでではよいが、いつの間にもやら逃げ出した。そんなことで一人前の兵隊と
は云へないではないか。

恐ろしいと思はなければ逃げ出す筈はない、恐ろしいと思つても許しがなければ退
却はしない筈だ、にも拘らず逃げ出した所を見ると、彼等は夢中になつてゐたんだ、
軍紀も何も忘れて自分一人になつて、戦友も何も目に入らなくなつたのだ。そして

さういふ状態は初陣の軍人には一瞬間あるものだ。

六 代表的戦争

物語は又岐路に入るやうだが、これが岐路にならぬことは後にわかる。前にも一寸
述べたやうに日本人は日本語を使用すべしといふ見地から、吾々は西洋人を餘りに尊
敬し過ぎるといふ事である。西洋人を尊敬し過ぎると終には西洋人に對して卑屈にな
る、彼等は先天的に吾々日本人より賢明で強いものだと思ふやうになる。さうなるこ
常に精神的にも物質的にも損を招かなければならぬことになる。西洋人は口には正義
とか人道とかいつて居るけれど、その正義人道なるものは彼等西洋人仲間の間にのみ
通用する正義人道で、吾々黄色人種や其他の有色人種には決して通用しない。
彼等は有色人種は先天的に白人種よりも劣等であると思つて居る、智識に於ても人
種血統其物に於ても白人は第一位に居ると彼等は廣言迄して居るでは無いか。そして

曰く、天帝は吾々白人をして此地球を支配せしむるやうに命じて居ると。
 全體血統の點に於て白人が有色人種の上位に在るとは、何人がそれを定めたのか、
 彼等自身が彼等自身を威張る爲めに勝手なことを廣言するのではないか。智識の點に
 於て優秀なりといふことは或程度迄は眞かも知れぬ、しかし智識が高いといふので直
 ちに上位に位するものとはいはれぬ、そんなことで等級を定め得られるものなら、日
 本と露西亞と比べたら、どうであらうか。白人の最も下等な連中よりも日本人が常に
 下位に立つとは斷じて云はれまい。さうすれば彼等の云ふ智識の點も甚だ疑はしい。
 全體國として優劣を定めるには、何を標準にするかと云へば、やれ富の程度とかや
 れ國土の廣狭とか、學問文化の程度とか色々やかましい問題はあらうが、結局戦争に
 勝利を得た國が一番の優位を占める、其證據には明治二十七年以前の日本と支那との
 狀況は如何であつたか、支那人は日本人を下等視し日本國を下等視して、事毎に日
 本及び日本人を輕侮したではないか。又世界各国も亦日本を目するに支那の一屬邦に

過ぎない位に思つて居た。

ところが、日清戦争が開かれて日本は連戦連勝を博した爲めに日本の世界的地位は
 支那の上に位するに至つた。支那人こそ負借しみに何といつたかは知らぬが、世界列
 強は日本を以て東洋唯一の獨立強國と目するに至つた。

又獨逸はどうか。百年前に奈破翁の爲めに散々蹂躪されて、其の世界的地位は佛國
 の下に在つた。ところが千八百七十、七十一年戦役に於て光輝ある大勝利を得た爲め
 獨逸の世界的地位は佛國の上位に坐し、國運益々隆々として歐洲大陸の覇者たらんと
 するの形勢を示した、何人も佛國や奧國と同等若くは其以下といふものはなくなつ
 た。(歐洲大戦の結果獨逸は不幸なる敗北を爲した爲め又々世界的地位は降下した、し
 かしこれは後の問題で日露戦争に今現に戰場に居る私に對しては、これは關係を有
 せぬことを斷つて置く。)

以上は有色人仲間の日本と支那、白人仲間の獨逸と佛蘭西を一例に採つたに過ぎな

いが、さういふ實例は到る處に棄てる程ある、それが戦争を基準として其の勝敗によつて優劣がきまるのだから驚くではないか。若しも戦争に勝利を得た方が必ずしも文明の程度や人種や血統の上等下等を意味するものではないといふなら、白人のいふ上位下位は何によつて定めるか、戦争に敗れても文明は文明であるから、依然として上位にあるべきか。

それなら、數百年前の文明國西班牙や葡萄牙は依然として歐洲否世界第一位の優秀國でなければならぬ。しかし是等の國は今日既に衰運に向ひ内亂外訌交々相次ぎて、遂に世界的第三位若くは其以下の國家となつて居るではないか。

これを要するに、戦争に強い國は世界が上等國のやうに認めて呉れるのは事實が證明して居る。戦争に勝つと國民の自信力を増し智識を増し品位を増すことは争はれないのである、國家は衰滅して文明のみ残つたさて、それが何になるか、印度の太古の文明はどうか、埃及の文明はどうか、支那はどうか、今日何人といへども有りもせぬ

羅馬帝國を實質的の上等國といふものは無いではないか。

然しながら、白人と白人の戦争、有色人と有色人との戦争は過去に於て幾多の實例の示す通り其の優劣の定めは戦争によるものが甚だ多い、けれど、更に一步を進めて白人と有色人との戦争はどうか。勿論英國が印度を征服した歴史、露西亞が小亞細亞地方に侵入した事實を見れば、有色人は常に白人の爲めに脆くも征服せられて、國土は奪はれ人民は塗炭の苦に陥つて居る、而して有色人は下等とせられて居る、これも征服せられた爲めに誠に已むを得ないことで、白人が何をいつても勝手に云はせるより外はない。

しかし、今眼前に展開されたる日露戦争は如何か。有色人と白人との文明的戦争である、吾々有色人はどうしても勝たなければならぬ。若しも此戦争に於て日本が敗北すれば、最早有色人の頭の上る時代は當分は來ない。否恐らく有色人は事實的に白人の奴隸となる外ないのである。若しも此戦争に於て露西亞が敗北すれば、白人が何れ

の點に於ても有色人に優れて居るといふ白人其自身の廣言は裏切らるゝのみならず、有色人と雖も白人に劣る何等の理由なきことを實證することになる。

さうすれば、此數百年間白人の主張した總べての勝手なる御題目は全然瓦解する。

のみならず日本は世界的地位に於て露西亞の上に立つやうになるかも知れぬ。しかも亞細亞に向てする白人の毒牙は當分不可能なるかも知れぬ。その責任の重き點に於て露西亞は白人の代表者であり、日本は有色人種の代表者である。彼は敗れざらんことを主眼とし我は彼を破らんことを主眼とする、彼は敗れずして従來の廣言を維持し我は敵を破りて有色人の悲嘆を救ひ且つ長き夢より醒さしめなければならぬ。吾々は奮闘努力しよう。

七 激戦の後

三月七日の戦闘は猛烈であつた。

山砲十八門と臼砲四門とが一齊に砲撃を開始したのは午前の四時半頃で、間もなく私の聯隊の第二大隊は例の最高地點の中腹にあつた。我砲兵の砲撃は僅か百米ばかりしかない正面の高地上に集中せられ、曉の景色の中に爆煙が棚曳いたと見ると、もう突撃した。次いで第三大隊が又突撃し、更に其後方には歩兵第四十〇聯隊の第一大隊が続いた。恰度『これでもか、これでもか。』

といふ調子に息もつがずに攻め立てた。

私は二番目の大隊と共に最高地の頂上に達したが、その時は敵は累々たる死傷者を遺して、高地の北側を崩雪を打つて敗走して居た。まだ、人顔は歴然とはわからなかつたが、私は軍旗を捧げて高地上に起つたとき、北方約三吉米の處に大市街のあるのを見た。

それは有名なる馬群野であつた。此方面の敵の根據地であつて、馬群野は彼の楊貴妃の死んだ地とし墳墓もあるといふので、私は其の市街を見て一種の詩的感興を惹き

起した。

間もなく四邊は明るくなつた。山頂並に南側には敵味方の死屍が山の如く横はつて居た。敵の野砲が二門破壊せられ、機關銃も三挺ばかり破損して居た。私は我軍の死者の中に、三日前に引率して来た補充員の顔のあるのを少なからず見て、一種云ふべからざる悲哀を感じた。彼等は戰場へ到着して三日目の朝死んで了つた。何んといふ果敢ない生命であらう、何といふ短い武運であらう。

この最高地点は一旦占領して又敵に奪ひ還へされて又占領し、又奪ひ還へされ、今朝更に奪取したもので、云はゞ随分骨を折らした高地である。幅員からいふなら僅々歩兵一中隊分の占領面であつて、殆んど馬鹿らしい程の小局地ではあるが、これを占領するや、北方には敵の根據地たる馬群鄂が見える、遙か北方には渾河右岸の高地線も雲烟霧糊の裡に見える、滿洲平野の東部が展望せられる、實に爽快にして且つ雄大な気分になる。

ところが、今や辛うじて占領した我軍は、馬群鄂北方の高地から敵の砲兵により、猛烈な砲撃を受け始めた。みんな塹壕の中に入つて敵の逆襲に備へて居る。第四〇聯隊の第一大隊は機を失せず前進して馬群鄂の攻撃を始めた。この攻撃さへ成功すれば、最早此の最高地点の争奪戦は終りとなる譯だ。

我が砲兵が一齊に砲撃をした爲め、詩的興趣を湧かした馬群鄂は火災が起つた。黒い煙が濛々と立昇るとき、私は聯隊の主力と共に同地に進入した。同地は間もなく我軍の占領する所となつたのである。市街の外方五百米ばかりの地に停止して居た。私共は、市街の猛火に、暖められて、寒さを忘れることが出来た。

午後からは全線追撃といふことになつて、私は馬群鄂の舊跡を探ぐることも出来ないて其の晩は康西八溝といふ村落に露營した。そして其の晩約四百名の俘虜の中に、再び「ウイシコフ」軍曹を見て驚いたのである。

彼は三日前の晩私の天幕の中に這ひ込んだ、そして一旦捕虜となつたが、運よく

逃げたと思つたら今朝の激戦で彼奴は再度我軍に捕へられたのである。

「貴様は吾輩を知つて居るか。」

と私は問ふた。

「はい、よく知つて居ります。」

と彼は答へた。

「貴様は異人種たる日本人に優待せられんことを欲するかどうか。」

「はい。私は恨みある露西亞の爲めに戦はんよりも、俘虜となつて永久に光榮ある日本に暮らさんことを希望します。」

と「ウイシコフ」は吐き出すやうに云つた。

「そんなことは吾輩は知らぬ、貴様はたゞ俘虜となつて俘虜の待遇を受くるのみだ。

貴様は日本人を以て野蠻視し下等人視するなら、恐らく日本人は野蠻にして且つ下等

であらう。若しも貴様が反對に思ふなら、總ては反對であらう。」と私は云つた。

八 俘虜の物語

私は馬群野の西北側で敵の一將校が横着を云つた爲め、我が一少尉の爲めに蹴飛ばされたことを忘れることが出来ない。

敵の其の將校は一等大尉といふ日本で云ふと少佐格のものであつた。彼は退却に遅れた爲め我聯隊の一小隊の突撃に遭ふて降参した。其の際彼「クレーギン」一等大尉は捕へられたのである。

彼は、

「余は露國の一等大尉である、貴官は日本の何階級なりや。」

と横山少尉に問ふた。少尉は

「余は大日本帝國陸軍の歩兵少尉である。」

と怒鳴つた。

「然らば階級に於て余は貴官の上位にある。」
 とまだ次ぎを云はうとしたとき、横山少尉は右足を上げて「クレーギン」一等大尉の
 向脛をいやといふ程蹴飛ばした。

「俘虜に對して階級があるか、平和の時代に於ても他國の將校と日本の將校との間には階級の區別はない、況んや敗者たる俘虜に於てをやだ、生意氣をいふな。」
 と云つて、少尉は再び彼奴を蹴飛ばした。

戦争には負けても彼等はその位の横着さを有して居る、といふのがみんな有色人を
 下等視して居るからだ。

彼は見事に蹴られた、實に痛快であつた。私も何ならお手傳しようかと思つた。ど
 し／＼やれ、彼等が屈伏するほどやれと私は叫んだ。實際俘虜になるやうな奴に階級
 も糞もあるもんではない。一等大尉が何か、上等大將がなにか、彼等は敗餘の破
 片ではないか。これで白人が優秀なら地球上に優秀ならざる人間は一人も居ない、亞

弗利加の山奥の黒奴だつてそんな負けしみや未練は云はないのである。負けたら神妙
 に負けた態度を取ればよい、何處に優秀な氣品があるか、何處に上等な態度があるか
 況んや正義人道は……。

私は胸が悪くなつた。

康西八溝で俘虜「ウイシヨフ」軍曹は云つた。

「今までもさうでしたが、一昨晚私は地隙の中で考へたんです、護旗將校殿……。」
 此護旗將校殿とは私のことを敬稱したのである。彼は徐ろに語り出した――

「私は何も知らなければ宜いのですが、なまじつか英國や佛國で自由思想を養成せら
 れたお陰に、この日露戦争が吾々波蘭人に對してどんなものであるかといふことを知
 つて居ます。御承知の通り私の故郷の波蘭は露西亞や獨逸の爲めに彼の通り殘忍な
 分割をされたのですから、私達からいふなら露西亞に對しては恨みこそあれ恩は無
 いのです。日本はどうか、日本に對しては恨みもなければ恩もない。怨みのある露西亞

の手下になつて恨も無い日本と戦争をしなければならぬ私達は實に愚の骨頂です。若しも露西亞が勝つとしますか、露西亞が勝つたら恐らく私共の故郷は重税と壓制とが一層増大せられるでせう、若しも日本が勝つとしますか、露西亞は恐らく賠償金やら國債やらで矢張り重税を課するでせう、勝つても負けても馬鹿を見るのは私達で、怨みも何も無い日本と戦ふのは波蘭人にとつてはチツとも意味を爲しませぬ。全體怨みのある奴等の手下になつたのが癪ですからね、それに出征するとき私の妻は「生きて還つて呉れ」と申しました。生き残りの母は「生きて還へらせ給へ」と十字を描きました。私は一昨晚それを思ひ出して急に護旗將校殿の幕舎の中に這ひ込んだのです、お察し下さい。それに私達は波蘭から出發して昨年は鴨綠江まで出て、あの通りの大敗、「ザスリツチ」とかいふ將軍は馬鹿な戦ひをしてそれから退却又退却、私は其の冬一旦奉天迄退却して、それから又此方面へ来て、又々この通りの體たらく、日本は現に勝ちつゝあるのです。それでも露軍中では他の方面に於て露軍が勝利

を得つゝあることを主張してゐます、しかし、それが僞りであることは私はよく知つてゐます。結局露軍は敗亡より外は無いのと私達は考へます。」と彼はいつた。

若しも「ウイシヨフ」が生粹の露國人であつたならば、私は或は彼奴を殴ぐつたかも知れない。假令斯様な弱兵が居て日本軍に利益を與へたりとはいへ。

が、私は彼の故郷が百年前どんな悲惨な目に遭つたかは臆氣ながら歴史で讀んだことがある。彼が今語つた通り露西亞に對して怨みこそ感ずれ、決して好意は抱かぬであらう、彼が斯くの如き言をなしたのは必ずしも國民的の誤謬とは云はれない、幾年かの後に波蘭が獨立するものとすれば益然りである。

(歐洲大戰の結果波蘭は獨立した。これを以て見ると二十年前の日露戦争が痛切に思ひ出される。)

だから、屬領地の男子を忠實なる軍人に仕立てようとするには、少くも屬領地と本

國との融和が長い間計られなければならぬ、英國が印度兵を以て日本を攻めようとするとき印度兵は眞に日本に敵對するであらうか。印度は日本の一部ではない、けれど彼等は有色人種たるの點に於て、亞細亞の民族であると云ふ點に於て既に共通して居る。さういふ先天的の關係こそあれ怨みも何も無い印度兵を以て日本や支那の軍隊と對抗せしめようとするやうなことがあつたら、それは明らかに英國の失敗と云はなければならぬ。賢明なる英國人はそれは百も承知である。が、日英同盟は今や無し英國が印度兵を以て亞細亞に對する立派な保護障壁なりと思ふなら、大きな災禍が懸て來るであらう。吾々は印度民族を有色人種とし東洋人とし亞細亞民族とし東洋文明の先覺者として大に尊敬し且つ親愛を感じて居るのである。

さて本題に歸へつて物語を續けることにしよう。康西八溝の夜は更けて人馬共に寢沈まらうとした夜半十二時頃旅團より命令が來て、即刻前進せよとの事だつたので、聯隊は午前二時頃集合を終り暗黒の中を北方に前進した、それは三月八日の未明のこ

とであつた。

九 弱國の悲惨

人顔の見える頃には私達は渾河の南方三里の地點に達して居た。別命ある迄停止との命令で、聯隊は前方に警戒部隊を出して休憩をした。何だかひどく疲労を感じてウト／＼居眠りをして居ると、なんだか騒々しいので氣が付いて見ると、其處に後手に括られた支那人が二人引据ゑられて居る。

どうするんだと訊いたら、

「此の畜生等は露探を働いたんで、今から殺られるんです。」と本部の下士がいつた。「ふむ」私はそれだけ聞いて、それだけ返事をしてそれで何とも感じなかつた。又うと／＼とし凡そ三十分間も眠つて目が醒めて見たら例の二人はもう首と胴とが別々になつてゐた。

「何人が殺つたんだ。」

と問ふたら、

『第○中隊長殿が斬りました。』

と下士は笑ひもせず語つた。

『なんだ、乃公の目の前で斬つたはよいが、斬り放して放つて置くなざア氣が利かん

よ、早く埋けてつ了へ』

私は不平をいふた。

『は、。あんまり不平を言ふまいぞ、人間の生命を取るといふ大切な場所て居眠り

してる方が餘程横着だぜ。』

と聯隊副官は笑つて居る。

そんな暢氣な私ではなかつたが、疲勞が斯かる大膽を作つたのだ、私の本性は決

してそんな平氣ではあり得ないのだ。それにしても同じ有色人であり乍ら、白人のお

使をするなんて支那人も甚だ心得違ひだつた。そんなことは御本人は一向無頓着で、

日本が負けようと露國が勝たうと痛痒は感じない、ルーヴル金貨を一つ呉れる方の兵隊さんがなつかしいのだ。

お午頃になると、十二三歳の少年が辨髪を頭上にクル／＼巻きにして、聯隊長の前に膝いて、次のやうな物語りをした。

『僕の父親は善人でしたが、露兵に見誤られて日本のお使ひだといつて、頭を割りました。又母親は二日二晩行衛不明でしたが、三日目の朝死體となつて家の下の沼の中に浮んでゐました、股やら腹やらには銃劍で刺した疵が澤山ありました。十七になる僕の姉はやはり行衛不明で今にそれは生死がわかりませぬ、四つになる弟は露兵が恐いといつて泣聲を立てたら、直ぐ胸を刺されて死にました。そして僕は……僕は一目散に駆け出して山の中に匿れましたが、お腹が空いて歩けなくなつたので、只今助けて貰ふ積りで、此處まで這ふやうにして出て來ました。』

聯隊長はこれを聞いて大に同情したらしい、本部の兵卒に命じて食物の残りを與へ

させた。少年はそれを恭やしく受けて、
 『多謝々々』とお辭儀をして。『何故日本兵と露兵とは此の満洲で戦争をするんです。満洲は何の關係も無いではありませんか。』
 と少年に似合はぬ健氣なことを問ふた。

『そりや、貴様の國が弱いからだ。貴様の國が強くて、日本兵や露國兵をして一歩も踏み込めぬやうに防ごうと出来れば、こんな戦争は満洲では起らなかつたんだ。』
 と聯隊長は教訓的に聞ひさせた。

『僕の國が弱い。弱いかは知らんが悪いことはしない。』と少年は不平らしい。

『貴様の國は悪い事はしなくつても、日本か又は露西亞か孰れか一つが悪ければ、こんなことになるんだ。そして露兵はずつと以前から此満洲に居て随分悪いことをしたてはないか。人の頭を割るのもつまり悪いことなんだ。』と大佐はいつた。

『そんなら日本兵は何故支那人の頭を割つたんです、現に今其處にその證據があるぢ

やありませんか。』と少年は肩を聳やかして居る。

『あの二人は眞實に悪いことをしたのだ。露兵の肩を持つて日本兵を殺さうとしたから、あの通りに殺されたのだ。貴様の國は悪くないと云ふけれど、悪いことをする人間は澤山ある、だからこんな戦争が起るんだ。』

聯隊長はこれ迄いつたが最早面倒臭くなつたらしい。

で、私は大に興味を感じて、少年を引いて私の前に坐はらせ、

『やい、少輩、理屈をいふない。戦争には勝つ方が正しいのだ。日本は今勝つて居るではないか、日本が勝てば貴様の國も救はれるんだ。それで此満洲には顔の色の蒼白い露兵が居なくなるよ、その爲めに日本兵が戦つて居るのを少輩は知らないのか。』
 と問ふた。少年はその邊のことは無智だつた。

一生懸命に殘飯を食つて居る。しかし兩親同胞と別れて孤獨となつた彼の身の上は如何にも可哀想であつた。人間もこゝまで落ちて行くと眞の價値がわかる。

彼はさういふ悲惨に對する憤怒ばかりでなく、一言滿洲といふ生國の事迄言及し得たことを以て異數の少年と謂はなければならぬ、日本の今日の少年が斯かる場合に交戦軍將校の面前で果して何をいひ得るであらうか。

一〇 後の記念日

有名なる三月十日が來た。これが後に陸軍記念日にならうとはその際思ひも及ばぬことであつた。二月の二十日過ぎから毎日々々戦ひが続いてとうとう三月十日で總勦定をすることになつた奉天附近の戦闘は、私は中途で到着したから悉くは知らぬ。知らぬけれども私には生れて始めて始めての實戦だつた。

三月九日の強い風と紅塵とで、我軍の運命は今やどういふことになりつゝあるか少しもわからなかつたが、十日の正午頃になつて、吾々の正面には敵は一人も居なくなつた。たつた十日ばかりの實戦で、もう私は一かどの老練家となつたやうな氣がした

何よりもかよりも露西亞といふ異人種の敵が日本といふ有色人種の爲めに撃退せられて、退却するといふことが一番痛快だつた。

からならなければならぬ。白人は決して吾々有色人より偉らくはないのである。彼等は唯横着なのだ、その横着を或程度迄働かざらぬが、今やそれも多少制限された少くも我大日本帝國に對しては最早横着は働かざらぬ。若しも彼等にして此上侮辱を以て我に臨むならば、吾々は再戦でも三戦でも辭する處ではない、否再戦三戦の必要なき迄第一戦に於て徹底的にやりとほして置かなければならぬ。それは彼等が憎いのではない、吾々有色人種の有利の爲めにである。

敵は崩雪を打つて北方に退却した。十日の午後私の聯隊が渾河右岸の高地を占領したとき、塹壕の中には敵の死傷者が非常に多く居た。大抵の奴は何も云はずに日本軍へ俘虜となつて降参した積りで居るらしい。體格の小さな男ぶりの悪い日本兵の前に、大きな圖體をした敵の將卒は羊の如く柔順に、携帶せる彈藥を投げ出し、小銃を

手放し、兩手を上にさし上げて降服の意を表して居た。

日本の軍人を捕へたときは無闇矢鱈に残忍になる彼等が、いざ捕へられたとなると全然青菜に鹽のやうな有様だ。少々憎くらしいとも思つた。

抵抗をしない捕虜を惨殺するやうな日本軍では無いが、陣中でこれを優待しなければならぬといふ義理合ひは更でない。撲たうとはたかうと殺さうと生かさうとそれは勝利者の自由の権利だ。殺さぬ代りにどんな目に會ふたかはそれは言ふ丈けが野暮だ。

私は彼等の裏面の弱い處を臆げながら研究することを得た。今日前に彼等の弱い實景を見ると、彼等に就いて恐ろしいと思ふことは何も無い。少くも彼等は人間の最上位の代物でないことだけは明白となつた。

道路の傍に腰を下して休んで居ると、凡そ千人ばかりの捕虜が、二分隊ばかりの日本兵の監督の下に南の方へ歩いて行く。

「あの羊を見る。」

と或兵卒がいつた。

「羊とは上出来だ。あれで恥しくはないだらうか。」と他の兵卒。

「機關砲で……。」又他の兵卒が。

「やい、ロスケ、手前達は日本へお客様に行くのか。」

一同思ひ／＼のことをいつて居る。

奉天戦闘がどんな工合に、どんな程度に行はれたのであるか、實際今日即ち三月十日の成績はどんなことであるか、私共は少しも知らぬ。唯目の前に發生したことをだけしかわかつて居らないから、自分等がやつた戦闘が一番激烈だつたと心得て居る。が今日が後に至り陸軍記念日となつて、永く國民の腦裡に刻せらるゝ大勝利だとは、中々知る範圍のものではなかつた、否恐らく大山總司令官其人ですら三月十日が日露戦争の最後の大戦闘であるとは思はなかつたであらう。何故かならば敵は今や歐羅巴本

國から新鋭な兵團を陸續として輸送し最終の勝利を得んとしつつある、恐らく奉天附近の會戦は大に彼等の膽を寒くしたには相違ないが、しかしそれが爲めに露西亞の本國に日本兵が侵入する譯ではないから、彼等は最早起つことの出来ない大敗戦だと思はない丈けは事實である。

日本軍は今や十分の勝利を得たといふことは出来ないが、少くも白人種の軍隊（優勢なる）を撃破し得ることの自信力は贏ち得たのである。けれどまだ波的艦隊は極東の海を指して来りつつある、歐本國の陸軍は次ぎの大會戦の爲めに来りつつある。彼等は殆んど無盡藏に近い兵力資源を以て我に對し我は限りある兵力と資源とを以て彼に對して居るから、戦争が長く續けば勢ひ我の不利になることは疑ふの餘地が無い。されば吾々は益々奮闘しなければならぬ、若しもこれまで築き上げた成果を、後の一戦で失つて了つたならば、日本の運命はどうなるものであらう。私はそれから後にかけて各種の實驗を経たが、それは章を更めて物語りするところとした。

私は今日この陸軍記念日に關して、何故これを陸軍記念日と命名したか其の意に苦しむものである。何故かといふなら、これは獨り三月十日に限らず五月二十七日の海軍記念日でもさうであるが、戦勝は單に陸軍若くは海軍に限つての名譽ではないからである。奉天附近の會戦で我が陸軍が大勝利を得たのは唯單に陸軍の力のみではない全然帝國が勝利を得たのである。海軍に於ても亦然りて、戦争は陸軍若くは海軍がするのではなくて、國民全體がするのである。であるから、陸軍の三月十日も海軍の五月二十七日も共に國家の戦勝記念日である。されば後の其の日に祝典を擧げるといふなら、『戦勝記念日』として軍人も政治家も一般人民も共にこれを祝すべきであつて、獨り軍人にのみ限るべきものではない。それを陸軍若くは海軍のみの記念日と定めたことは甚だ當を得て居ないものと思ふのである。況んや今日の如き世の有様では益々その事が痛切に感ぜらるゝのである。

第二章 戦争の背面

一 發端

第二章に現はれる物語に關し左の通り約束を定めて置く。但しこの物語は子爵金子堅太郎閣下の或席上に於てせられた談話を基礎とせるものであつて、若しも内容に幾分かの誤謬（大抵無いつもりではあるが）があつたならば、それは子爵の責でなくて全然著者自身の罪である。

○時代 明治三十七年より同三十八年に至る間

○場所 日本及米國

○人物 子爵 金子堅太郎（貴族院議員 現在樞密顧問官）

公爵 伊藤博文（貴族院議長）（故人）

米國大統領 ルーズヴェルト（故人）

（本文中では單に「ル」氏若くは「ル」大統領と呼ぶ）

陸軍大臣寺内正毅（後の伯爵）（故人）

元帥侯爵 山縣有朋（後の公爵）（故人）

參謀次長男爵 兒玉源太郎（後の伯爵）（故人）

海軍大臣男爵 山本權兵衛（後の伯爵）

米國副統領 タフト

其他 數名

この物語は明治三十七年二月日露戦争の始まる以前から、三十八年秋米國ポーツマスに於て日露の間に講和が成立した迄の間のことであつて、或重大なる使命を帯びて金子子爵が米國に渡り、時の大統領「ルーズヴェルト」卿に會ひ種々なる苦心を重ね

重大なる使命を盡した事實で、子爵は曾てこれを將校會合の席上に於て「諸君に謝す」といはれたことである、何故軍人に感謝せられたか、軍人の力によつて戦勝を得たから、子爵が功を成すことを得たによつて謝せられたのか、決してさうでは無い、著者は親しく該席上に列なつて聴いた一人であるが、老齡なる子爵が諄々として往時を語られたとき、私は思はず感極まつて涙が出た。或はこの物語は他の形式によりて世に發表せらるかも知らぬが、私は聴き得たことをそれに関はらず讀者に提供することにした。

二 成敗利鈍は問はず (其一)

明治三十七年の初め頃の事であつた。或日の晩静かなる晚餐を麴町の自邸で済ました子爵金子堅太郎氏は、いつもの通り新聞など讀みながら食後の或時間を消して居たが、不意に時の貴族院議長公爵伊藤博文卿より、

「甚だ御苦勞であるが、折入つて貴君にお頼みしたい事があるから、今から直ちに議長官舎まで来て貰ひたい。」との電話がかゝつた。

遠くもあらぬ距離、夜分の急ぎの電話、何事ならんと金子子は腕車を飛ばして議長官舎に着いた。通されたのは十二疊の日本間公爵の居間である。

公爵はと見れば、白の袴を着て、ひどく沈黙に陥り、互ひに一禮をした後何事の使用かと公の話しを待つて居たが五分たつても六分たつても公は口を開かない。時々深い長い太息を吐きながらしきりに首を傾けては考へこんで居られる。

「如何なる御用向て御座いますか。」
子爵は問ふた。

「……………」公は何も云はなす。
「どんな御用事でせう。」子爵は二度目にかう問ふた。

「……………」公は何も云はなす。

しきりにため息を吐き、首を胸にうづめて深く／＼考へ込んで居る。まことに或重大な難事に對して思ひ屈した様子。

「御用向きは何て御座りますか。」

三度目に子爵は又問ふた。

けれど公は何も答へずして、兩眼を閉ぢて身動きもせぬ。

稍、ありて、公は傍の呼鈴を押して女中を招んだ。女中はしとやかに襖を開いて兩手をついた。

「うむ、飯を食はう」と唯一言、そして金子子に向つて、

「貴君はお食事はまだかね？」

と問ふた。

「いや私はもう済まして來ました。」

と子爵は答へた。

「それでは一寸失禮だが、飯を一杯食ふから。」と公は其處に膳を運ばせて、しかも白粥を唯一杯食鹽を入れて、やつと一杯丈け食つて、さてこれを女中に持ち去らせて、再び火鉢に手を翳して、考へ込んだ。

「御用向きは……………」

子爵は又問ふた。

漸くにして公は顔を擧げ、咳一咳。

「貴君をお招きしたのは、實は、重大なことが起つたので、貴君に是非御苦勞を願はなければならぬので、お招きしたのである。」

といつた。

「如何なる事で御座いませうか、堅太郎の身に叶ふことならば何事にも致ませう。」と子は答へた。

公は極めて嚴かな態度で、兩膝を直ほし、非常に沈着した様子で、
 「實は只今、陛下の御前會議に於て、日露開戦の御裁可を得たのである。それについて、貴君に御願ひしなければならぬことは、米國がこの日露戦争を如何に觀るか、既に英國は日英同盟の誼によつて日本に同情を寄せては居るけれど、佛國といひ獨逸といひみんな露西亞の同盟若くは同情國である。若しも米國の同情が日本に來らずして露西亞の方へ行つたとすれば、日本は非常に不利の位置に立たねばならぬ。て、君に願ひするといふのは御苦勞ではあるが帝國の爲めにこれから米國へ行つて、米國の同情が日本の上に集まるやうに骨を折つて貰ひたい、この重大な任務を果し得るものは君を措いて他にない、困難ではあらうが是非君にお願ひするのである。」

これが伊藤公の言葉であつた。

子爵は實に驚いた。日露戦争は早かれ晚かれ開かれざるを得ない運命ではあるが、只今御裁可があつたといふこと並に微力な自分に斯かる大任が降り來るといふことが

大なる驚きであつた。

「左様で御座いますか。しかし、これは頗る重大な任務でありまして、私如き微力では到底出来ることではありませぬ。甚だ本意では御座いますが、これは餘の人に御申付け下されますやう、到底堅太郎にはこれは出来ませぬ。」
 と子爵は辭退した。

「いや、貴君に斷られてはもう他に行く人は居ない。君は米國の大學で「ル」大統領とは同窓の誼しみもあるし、又永く米國に居られたので、米國の事情もよく御存じてある。君を措いて他には適任者は無い、曲げて行つて貰はなければならぬ。」
 と公爵は熱心に勸告された。

けれど子爵は眞にこれは成算が無いと思つた。とても自分の舌頭三寸で米國人を説き伏せて同情を日本に得るなど不可能の上の不可能であると信じた。

「どうかこのことは明朝迄考へさせて頂きたい」といつて其晩は辭して歸つた。

三 成敗利鈍は問はず (其二)

金子子が此重任は到底自分では果されぬと思つたには、次の理由があつた。

一、米國の富豪の多くは其の娘を露西亞の貴族に嫁入させて居る。で、云はば米國富豪と露西亞貴族とは多くは姻戚關係に在るからそれを棄て、日本に肩を持つ道理は無い。

二、米國の物質は其の大部分は露西亞が得意先きてある。貿易の大切な露西亞を棄てて日本を愛する道理が無い。

三、英國の内愛蘭の住民は常に英本國を怨んで居る。その愛蘭種の米國人が英國を憎むことは當然で、殊に英國が日本の同盟國であるといふので、延いて日本に同情を持つ筈はない。

右の外外交上の見地からこれはどうしても不可能の事だと子爵は考へた。

昨夜熟考させて下さいといつて一先づ歸邸した子爵は、朝になつて斷然辭退する決心であつた。まだその辭退のことを伊藤公に通ぜぬ前に又電話があつて、

『今直ぐ來て貰ひたい。』といふのであつた。

で、子爵は又々俾を驅つて公爵の官舎へ行つた、通されたは昨日の室。

『是非君にお願する。もう考へる餘地はない曲げて行つて貰ひたい。』

との言葉であつた。

『いや、それは到底堅太郎の微力では成功は致しませぬ。どうか餘の人に御命じ下されますやう切にお願ひ致します。』

と子爵は、具さに不成功の理由を述べて辭退した。

さうすると伊藤公は急に態度が更まり、

『貴君は成功不成功といふが、抑、今回御裁可を得た日露戦争の勝敗は如何か、果して日本に勝算があるご君は思はれるか、不肖博文も亦到底勝算があるとは考へて居り

ませぬ。勝算は無いかれども、やらなければならぬ戦争ではないか。百萬の大軍が壓倒されて満洲から朝鮮を通ほつて釜山の方へ退却して来たとき、この博文は愚妻も娘も白鉢巻に襷がけて、炊き出しをさせて、九州や長門の海岸で防ぎ留め博文の最後の血の一滴まで断じて敵の足を日本の土に踏み込ませはせぬと覺悟をして居る。成敗利鈍は問ふ所にあらず、しなければならぬ戦争ぢやからするのだ。貴君にはそれだけの覺悟は無いか。米國に渡つて成功するに否とは第二の問題ぢや、それだけの覺悟を以てやつて貰へば十分なのぢや、成敗利鈍なんか眼中には無い……』

眉は上り眼は血走り、火を吐くが如き熱誠丹心、子爵は思はず石の如く冷え切つた頭の中は一大決意の熱血は迸り、感激と犠牲心とは溢るゝが如く全身を漲り流れた。

よくわかりました。堅太郎死を以てこの大任を果します。勿論成敗利鈍は問ひませぬ、これから米國へ渡つて身心の續く限りやりませう』

公の忠誠なる勸告に子爵も死を覺悟して行くに誓つた。

『では貴君は承諾して下されたか。誠に御苦勞御困難な立場の程は什々お察し致すが君國の爲め十分に御盡力が願ひたい。……あゝ、これで安心した、桂も定めし安堵するであらう。』

といひながら、公爵は自身電語を以て時の内閣總理大臣伯爵桂太郎卿を招び出して、『只今金子が同意をして呉れたから、安心なさるやう。』と告げた、實に一場の劇を見るが如くであつた。

動員令は各師團に下り、東京の市街内にも頼みに軍人の數を増し、世の中は急に忙しくなつた。重大なる任務を負ふて遠からず渡米する金子氏は相州葉山の別荘にある家族を東京に引揚げ、我亡き後の事迄も夫々定め整頓してこれを家族に示し、出發の準備を爲さん爲めに一先づ葉山に出かけた。恰も其の列車に香川皇后大夫も亦葉山へ行かれる所だつたので、近々渡米することをそれとなく物語つたが、それが後に計ら

ずも一事件を起した。

但しその事件は悪い事件ではない。

子爵の葉山の別荘は其の當時 皇室の葉山別邸の直ぐ近傍にあつて、海を展望する誠に絶佳なる位置だつた、後にこれは献上したので今は別邸の内に組み入れられてゐる。當時葉山の別邸には 皇后陛下御避寒中であつたので、香川大夫は東京から往復して居たのである。勿論如何なる用向きで渡米するかは、皇后大夫は知らぬ筈であつたが、固より金子子よりも話さなかつたけれど、大夫は或はその概略を心得て居たのか、

『それは實に御苦勞である。何分よろしく御奮勵の程を祈る。』

といつた。

『それから子爵は葉山の別荘に着いて、夫人や令息達と短日時の休養を行ひ、渡米後の諸計畫を立て、金子家の行末を定めてよくこれを後の者に云ひ聞かせ萬事思ひ残す

ことなく事は濟んだ。

四 恩賜の御菓子 (其一)

金子子爵の別荘は葉山の海近く、恰も御別邸の近くにあつた、今日では其別荘は陛下に献上して御別邸の中に組み入れられて居るが、實に眺望の絶佳な、心地の良い位置であつた。子爵は茲に簡単な家を作り、お客様用として廣くない二間を有して居た。

大部分渡米の準備を済まして、近々歸京せんとして居た子爵は、或朝未だ寢床の中にあつて、庭の方に當り不思議な物音を聞いた。女中共が庭の掃除でもして居るかと思ふと、さうでも無い。なにか騒々しくゴシ／＼といふやうな音がする、自身の胸の中も何となく穏やかにない。

氣になるので、家の者を招んで訊いてみると、

『先刻から宮内省のお方が見えて、立關先きの方を御掃除して居られます。』
といふ。

御別邸の御掃除なら宮内省の方々が掃除もせられるだらうが、なんぼ御念の入つた御掃除とは云へ、臣下たる金子の別荘まで御掃除なさる筈は無い、若しも何かの間違ひであつたならば、それは早々御辭退申上げなければならぬ事である。

子爵はガバと床をはね起き、立關先きに出て、今掃除中の人々に何故そんな所を浄められるのであるかと尋ねた。さうすると宮内官の一人は、

『これは金子の耳に入れるなどの 皇后陛下の御意でありましたけれど、只今となつては申上げて差支御座いますまい。實は 皇后陛下には俄かに御思召があつて、金子の屋敷に行かうと仰せ出されました。なんでも此方の御邸の眺望が大變よいといふことで、一つ金子の室から眺めてみたいとの御意。金子にはいふな、いふとやれどうだのといつて世話をかけるのが氣の毒であるから、平日のまゝでよろしい、そのま

ゝで行くと仰せられました、もう追付け御見えになりませう。』
といつた。

なに、皇后陛下がこの金子の別荘へ來ると仰せられる、それも後の事かも追つて御來着があるといふ趣き。

驚いたのは子爵で、それは實に恐多いことである。何はさて措き客間の掃除丈けはして置かなければならぬといふので、別荘内は急に上を下への大騒ぎ、夫人や令息令嬢召使の者に至るまで、衣服を更めさせ、とにかく不充分ながら客間の上坐到玉座をしつらへ、一同待つ間程なく 皇后陛下は御機嫌いと麗はしく、徐々金子子爵別荘の立關に御着きになつた。

實に晴天の霹靂とても申上げようか。豫想の外のことであつた。

門前にて御迎へ申上げた子爵夫妻は、恭しく 陛下を御案内して心ばかりの玉座に至り、恐入つて拜伏して居た。すると、いと朗らかな御聲にて、

「今日は天氣もよし、其方の別荘は眺めがよいこの事であるから、迷惑とは思ふたがそれを見に来たのである。」

との仰出。

「誠に畏多き次第で御座りまする。」

と子爵は奉答した。

「時に其方は今回米國へ行かれるさうであるが、定めし大切な骨の折れる任務であらうと推察する。十分自重して國の爲めに働いて呉れるやう。」

との第二の御意。

子爵は萬感溢れてハラ／＼と落涙した。

「何か其方に土産を持つて来ようと思ふたが。急なことでそれも出来ぬであつた故、幸ひ茲に菓子があつたから、少々ながらこれを進せる。」

この第三の御言葉。

陛下は斯く仰せられて、御手づから紙に包んだ御菓子を子爵、次いで夫人、令息令嬢に至るまで下し賜はつた。

實に有難い事であつた。

子爵は恐る／＼御禮を言上し、尙ほ種々御下間に奉答して陛下の御慰みを助けて居たが陛下は間もなく御別邸へ還御あらせられた。決して眺望のよいのを御眺めの爲めに御出なされたのではない。困難な任務——それは一命は無い程のむづかしい任務の爲めに、外國に行かんとする子爵の上を哀れに思召して、それとなくこれを勵まし國の爲めに盡させようとの深い高い天晴れなる御心からの御出ましてあつた。

先日列車の中で香川皇后大夫に會ふたとき、一寸渡米の事を話したので、大夫はこれを陛下に申上げ、かつはそれが陛下の思召となつて、突然別荘へ御出でになることゝなつたのである。伊藤公の成敗利鈍は問はずといふた一言に感激して粉骨碎身せんと決心した子爵が、今目前に斯かる稀有の出来事に會ふて、益々感激の意を深う

したのは決して偶然ではないのである。この恩賜の御菓子については次に述べることとする。

五 恩賜の御菓子 (其二)

子爵を始め家人一同に下し賜はつた御菓子は、随分澤山なものであつた。有難くそれを頂戴して、大部分の御菓子は子爵の氣付により、それを執事に持たせて歸京させた。

近衛師團に動員令が下り、野戦隊は兵舎を補充隊に譲り市中に宿營した。番町の金子子爵邸には某歩兵中尉一名及兵卒十名がそれを宿舎として滞在して居た。「お前はそれを番町へ持ち歸つて、宿泊して居る兵士達へ、よく今日の事を話して御下賜品の御裾分けをするから、召上れといつて進ませよ。」と子爵は執事に申付けた。

執事は委細承知して、番町の本邸に歸へり、某中尉に右の事を物語り、「この御菓子は特に當主人より皆様に差上げて呉れとの申付て御座ります、」といつた。

中尉は急に威儀を正し、兩膝を揃へて、

「それは畏れ多いことであります。然らば頂戴致します。」

といつて、恭しく三拜し、それを受けて室に歸へり、

「皆の者、此處へ集れ。」と命じた。

十名の兵卒は集まつた。中尉は詳しく皇后陛下のことを物語り、子爵の好意を言ひ聞かせ、

「みんな井戸傍へ行つて手足を洗ひ、口をそいで來い。」といつた。

一同は口をそしぎ手を洗つて又集まつた。

「有難い御菓子を分配する。分配するが少し頂いて置くだ。残つたのは背囊の中に

容れて、それから愈々戦場に出て、いざ前進と云ふとき、背囊から出して一口頂戴せよ、一べんに食べて了ふんぢや無らぞ。』

と中尉は嚴かな態度で言ひきかせた。

一同は其の通り少し頂戴して、後は全部背囊の中に收容した。そして彼等は其後二三日にして戦地へ向ひ出發したのである。

執事は中尉の態度を深く感服した。そして委細この事を子爵に復命したので、子爵も亦大に満足したのである。何人も陛下に對しては斯くの如き敬虔なる態度でありたいと思つた。

それから子爵は米國に渡り、明治三十八年の冬歸朝したが、明けて三十九年の春或一日、子爵の玄關に一人の將校が訪ねて來た。恰も子爵は不在であつたので、執事に對し、其の將校は極めて眞面目な態度を以て、

『先年私共が動員中此御屋敷で御厄介になつて居つた際、御主人が 皇后陛下より

賜られた御菓子御裾分けを受け、私以下十名の者が有難く頂戴し、いざ前進といふとき、少しづつそれを頂戴したが、實に不思議なことで、近衛師團は鴨綠江の會戦を手始めに最後の大戰に至るまで、夥しい損害を受けましたに拘らず、あの際の十一名はみんな無事に、負傷さへもせず、人並劣らぬ手柄を立て、皆凱旋を致しました。それは 陛下の御稜威であると共に實に子爵閣下の御好意によることで、今日御禮に參上した次第であります。子爵が御歸邸なされましたならば、私が一同を代表して御禮に參つたといふことをよく御傳へ下さるやう……。』

と中尉は挨拶をした。

實に不思議と云へば不思議なことで、十一名が負傷さへもしなかつた、それも卑怯な振舞でもしたといふことか、一同殊勳で金鷄勳章も賜はつたといふのである。子爵も執事からこれを聞かれて、非常に驚かれ、且つ満足したのである。

其後何かの機會に 皇后陛下に拜謁したとき、右の事を申し上げたら 陛下も御首を

傾けさせられ、

『それは誠に不思議である。』

と仰せられて、いと御満足の體であつたといふことである。

さてこれから本題に立ちかへる。

六 五分五分か六分四分か

準備全く成れる子爵は、いよく米國に向け出帆することとなつた。

前にも申す通り、米國の同情を日本に引き付けようといふことは、十中の九分九厘迄は出来ない相談である。唯一縷の光明とする處は、戦争が日本に勝利であるか、

失敗であるかによつて、これが明らかとなる。果して我陸軍に於ては戦勝の成算ありや否や、我海軍に於ても亦戦勝の胸算ありや否や。若しも米國に居る間に、外國電報

は頻々として日本軍の敗戦を傳へるといふやうなことであつたならば、百の金子ありとも何の効果も無い。戦勝の望みがあるといふことなら、假令敗報しきりに來ると雖も、いつか勝利の聲は上つて來る、その邊の見込はどんなものであらう。

とにかく、一身をはめて異國に出るこゝであるから、陸軍當局と海軍當局とにその邊の見込を聞いて置かねばならぬと子爵は考へた。で、いよく出發の前日陸軍省に時の陸相寺内正毅中將を訪ふた。恰もよし其處には山縣元帥もあつて、これ亦鳩首議を凝らして居る。

『いよく行くについては、御差支の無い限り私に戦争の成敗に關して話して貰ひたす。』

といつて、要點の質問をした。

さうすると山縣元帥は、

『いや、その事なら參謀本部に今兒玉(源太郎)が居るから、その方で聞いて貰ひた

い。今兒玉が熱心にその事の畫策をして居るから。』
と云つた。

て、金子子は直ちに參謀本部に兒玉次長を訪ねて、來意を述べると、兒玉大將は兩手を前に組んで、

『實に貴君も今回は御苦勞だ。ま、とにかくよろしく頼む。』と云つて、

『お尋ねの勝利の事ぢやて、……………』

といつたまゝ、黙り込んで了つた。後の總參謀長兒玉男爵の快活な人がかういふ態度を取る所を見ると、勝利は困難だといふことを直覺せずには居られない。

兒玉大將はやがて口を開いた。

『戦争はまア五分+分ぢや、この五分五分の戦争を六分四分にしようと思つて、吾輩先月から家には歸らないで、毛布一枚かぶつて參謀本部にくすぶつて居るのぢや。まアよくいつて六分四分ぢやらう。貴君は米國へ行くなら六回は日本の勝報を得四回は

敗報を得ると思つて行つて呉れ給へ、それもしかし餘程旨くいつた場合の事なんだよ。』

といつた。

何といふ心細い事であらう。

しかし、それも致方ない。唯一人米國人の中に交はつて、六回の勝利を聞き、四回の敗戦を耳にするときの心持は……………。

子爵は其處を辭して其足で海軍省に時の大臣山本權兵衛中將を訪ねて、陸軍と同じことを訊いた。山本大臣はいつた。

『……………さうだね、……………終局には日本海軍が勝つ、しかし其代りに海軍の三分の二は沈没して了ふぞ。』

終局には勝つといつた一言は大に子爵の心を鼓舞した。が、陸軍と海軍と合してこれを平均して見ると、戦勝は得られるかも知らぬが、しかし其の戦績は僅かな勝利で

殆んど云ふに足らぬ勝利であるといふことに歸する。

それも致方ない。

子爵は六分四分を深く覺悟して、やがて米國行きの汽船に乗り、戀しきなつかしき日本國を後にして出帆した。生きて歸へるやら死んで米土と化するやら。

只一つ頼む所は時の米國大統領ルーズヴェルト卿は其の青年時代に於て子爵と共に「ハーヴァード」大學の同窓生であるから、個人的の友人であること、若しも大統領にして幾分にも日本の立場を了解するなら、個人的にでも一片の同情を金子の上に垂るであらうといふことこれのみであつた。

二十日足らずの航海で、船は重任を帯べる子爵金子堅太郎を米國サンフランシスコの港に上陸させた。

子が上陸した日茲に思ひがけなき情報を得た。それは、今回の日露戦争に關し米國は局外中立である、されば米國人は各々自重して嚴正に中立の態度を保持しなければ

ばならぬ、露西亞又は日本に同情的態度を取つて、國際上の信用を害してはならぬといふ要旨の大統領の訓令が布達せられたのである。

大統領のこの訓令は今上陸したばかりの金子子を甚しく失望させた。何故かといふと、そんな訓令が無くても米國人の心は既に大部分露西亞の方に向ひて居る筈であるから、此訓令によつて表面露西亞に同情するといふことはしなくなるにしても、これにて日本が利益を得るといふことにはならないのみならず、米國人の或部分に日本への同情者があつた場合、その同情を聲明して幾分でも日本の爲めに計るといふことが出来なくなる譯である。放つて置けば同情は露國へ行く性質のものであるから、どうしても積極的手段によつてこれを日本に導くやうにしなければならぬ。ところが大統領の訓令によつて、それが甚だ困難なことになつたのである。

『これは實に困つた。』
と子爵は長大息を吐いた。

上陸早々甚だ縁喜が良くないので、前途の程を氣遣ひつゝ、桑港の或る旅館に投じたのである。新聞やら種々の噂を聞くと、日露戦争の事などはあまり此の方面には響いて居らぬ、否響いて居ないのではない、日本が露西亞と戦争するなどは殆んど無謀の擧て、敗るる事にきまつて居ると思つて居るらしい。

四圍の情況は何一つとして日本に有利なものはない。この廣い米國に來て種々の人種から成る米國人に、日本が已むを得ず戦争を始めたといふ立場を知らしめ、その同情を日本に向けるなどとは到底成功すべきもので無いと思はれた。

けれど、どうしてもやる丈けはやらなければならぬ。やるには桑港では不適當である。て、子爵は紐育に行くことにした。

七 四面楚歌の聲

米國へ行つて事を爲さんとするには、太平洋沿岸の桑港などにうろくして居ては

駄目だ。どうしても太西洋近くの政治の中心商業の中心地たる紐育でなければならぬ。米國中央政府の所在地は華府であるから、華府がよいては無いかと、思ふ人があるかも知れぬが、同地は單に中央政府があるに止まり、決して政治の中心地では無い。唯政廳があるといふに過ぎないのである。

桑港から大陸横斷の汽車に乗つて、金子子が紐育に着いたのは三月廿五日の事であつた。青年時代の大部分を米國で送つた子爵の事であるから、紐育のどんな所が、この重大なる使命を果すに適當であるかは、よく心得て居る。とにかく、日露戦争が何の程度に米國に反響して居るかを知り、どの程度まで日本に同情を向け得るかを見る爲め、子は最も適當と思ふ旅館に居を定めた。この旅館の隣りには「〇〇ホテル」と稱して有名なものがあつた。

其處で話を聴くと、今夜隣りのホテルで一大夜會があるとの事、どんな種類の夜會かと云ふと、紐育及其の附近の紳士の貴婦人達が寄り集まつて、露西亞の戦勝を祝

福する爲めの夜會であるとの事であつた。つまり米國上流の貴婦人連が露西亞の爲めに聲援し、豫め戦勝を祈り大に露西亞の爲めに氣勢を揚げようといふのである。

これを知つた子爵の胸中はどうであつたであらう。

萬里の波濤を越えて漸く目的とする地に着いた早々、この凶報あるとは實に心細いことだつたに相違ない。

しかしそれも致方無い。

ところが、窓を開きて賑やかな市街の光景を眺めて居た子爵の兩眼には更に不思議なものも映じた。それは何千といふ群衆が旗を樹て樂隊を先頭に行列して、

「露國萬歳」

を連呼しながら示威運動をして居る。今恰度其の列の先頭が子爵の窺いて居る窓の下に進んで來た。

これは露西亞の爲めに行列である。それを米國市民がやつて居る。子爵は窓をしめ

た。外に日本の爲めに行列をして呉れる人々が居るかどうか。恐らく一人もあるまい。

今重大なる使命を帯びて日本人が一人、此旅館に投宿して居るといふことを知つて居てやることであらうかどうか。

未だ使命を果すに何一度として着手して居ない際に當り、この様な有様を見、前途の程を危ぶみ、日本の運命の程を危ぶみ、心細い我身の上を危ぶみ、誰一人心を慰めて呉れる者は無し、白人の中に唯一人黄色人種が混つて、この皮肉なる行列を見たとき、誰か其のときの子爵の心中を推察せぬ者があらう。

『そのときの私の胸中は御察しに任せます。』

と子爵は物語られた。

實際辛らかつたらう。

ところが、今日は三月二十五日、日露戦争は既に宣戦の布告も済み、仁川に露の二

艦を撃沈し、次いで旅順に海軍の襲撃を行ひ、露の海軍司令長官「マカロフ」中將が旅順口内で沈没して戦死した後のことである。

金子子が日本の宣傳者として米國內に入り込んだと同様、露西亞よりも多くの宣傳者が入り込んで居たことは申す迄も無い。露西亞の宣傳者は到る處で演説會を開き日本を指して、

『黄色の小猿め、何事をか爲し得ん。』
と常に日本を侮辱した。

『哥薩克の馬蹄一度滿洲の野に印せんか、黄色の小猿は塵の如く飛ばんのみ。』
と傲語した。

其の都度聴衆は拍子喝采した。しかも日本の爲め唯のひとでも氣勢を揚げて呉れる者は一人も居なかつた。敵國側の宣傳者が演説した事柄は其の都度米國の諸新聞に掲載せられ、黄色の小猿の罵倒は屢々活字にも現はれて居た。つまり、露西亞側の宣

傳は日本が強國露西亞に向つて宣戦したのは身の程を知らぬ無謀の擧で、云はば螻蟻の斧を龍車に揮ふに等しい風に響いて居た。何故開戦するに至つたかは明らかで無い、つまり日本といふ黄色の小猿が善いにしろ惡いにしろ、露西亞といふ白人の強國に對して戦争を始めたのが、生意氣だといつて居た。これを評すれば露西亞の宣傳は無闇に日本を侮辱して、自分を偉らがりそれによつて、米國をして露西亞に同情を寄することの有利であるといふ風に聞えて居た。従つて常識の足らざる米國の或部分の人士はこれに雷同したことは誠に已むを得ないのである。

日本からは誰がこれに對抗して宣傳をするか。今其の使命を帯びて來た金子子がやらなければ外にそれを實行するものは無い。しかもこの光景を見た子爵の胸中に果して成算ありや否やである。實に四面楚歌を聞くとはこの事であらう。困難否殆んど成功は不可能であるやうに見えたのである。

ハ White House (白聖館)

この悲觀すべき光景を見い／＼子爵は次の日華府に至り、白聖館に大統領ルーズヴェルト卿を訪ふた。

さうすると、「ル」卿は明日面會しようと言つた。「ル」卿は實に日本の親友であると共に個人としては金子子爵「ハーバード」大學同窓生であり親友であるのである。若しも子爵の胸中に一片の依頼點ありとすれば、それは個人的の親交を以て「ル」卿の好意を得るにあること其れのみであつた。けれど「ル」卿は今や北米共和國の大統領である。公人として彼の爲す所も私人として爲す所も同じく彼は大統領として、一言一行を慎まなければならぬ身である。而かも米國の態度は局外中立に在るから、「ル」卿の態度も亦飽くまで嚴正なる局外中立でなければならぬ。唯兩人が相會して語り得る所は舊友としての情誼の外恐らく許さるべき何物も無いであらう。

● 次の日子爵は官邸白聖館に「ル」卿を訪ねた。刺を通じて玄關に立つや、これは又思ひ掛けもなく、「ル」卿は自ら玄關まで出て来て、

「やあ、よく見えた。ヒア、どうぞ。」

といつて、子爵の左手に自分の右腕を組み合はせ、さも待ち焦れた戀人の如く、いかにも可憐しやうに子爵を導いて、一室に案内した。

實に氣持の好い應接振り、これが舊友のお蔭であらう、日本の友人たる「ル」卿の態度であらう。子爵の兩眼からはハラ／＼と感激の涙が流れた。たとひ友人たりとも「ル」卿は今米國の國王も同然の最高權威者である、其の尊い人が、日本の一使臣を斯くも親愛的に應接することは誠に豫想外と謂はなければならぬ。

「貴君の來られるのを待つて居た。もう餘程以前日本からは通知があつたので、今日か明日かとお待ちした。久しぶりに舊友に會ふことは余の最も愉快とする所である。」と「ル」卿は胸襟を開いて、第一の挨拶をした。

「余は重大なる使命を帯びて貴國に來たのであるが、大統領閣下の御機嫌よき體を見て實に欣快に堪へない。平素疎略の段は偏に御宥恕ありたい。」

と子爵はこれに返へした。

「なんのくそんなことはお互ひ様である。」

と「ル」卿は實に愛嬌がよい。

「時に貴君は大統領として余の發布したる局外中立に關する訓令を見られたか。」と問ふた。

「然り、余が桑港に上陸せる日これを見た、それで實に困つて居る。」

と子爵は云つた。

「何も困ることは無いではないか、貴君はあの訓令を出した原因を知らないから、さういふ風に思はれるか知らんが、實はねえ……」

と大統領は聲を低うして、「實は今回の日露戦争で、我が米國の壯丁殊に將校等は全部

日本に同情を寄せて、日本の爲めに祝福し日本の爲めに積極的聲援をするといふ有様なので、さうやられては中立上甚だ穩やかならんから、已むを得ずあの訓令を下したのである。悪しからず御諒察が願ひたい。……斯く申すこの「ルーズヴェルト」も亦……日本の……大に同情をして居るのである。決して御心配には及ばぬ、何なりと日本の爲めに必要といふことであるならば、余は能ふ限りの事をしようから、遠慮なく申出されたい。」

と「ル」卿は言明した。

實に意外千萬なことで、明日紐育で見たことは全然反對なことである。このときの子爵の歡喜はどんなものであつたであらうか、面敵の重圍の中にあつたと思つた者が、一道の光明を發見したときの喜び以上のものであつたに相違ない。

「いや實にかたじけない。しかし一昨日紐育で見たことは……。」と皆までいはず「ル」卿はそれを受けて、

「そんなこともあらう、なれど、それは露西亞の同情者が少いから、何とかして氣勢を揚げようとおせるのである。貴君の眼にその中心が映じたから、さう思はれるであらうけれど、眞の人々は心の中では笑つて居る。本當の日本の同情者はそんな浮いた調子のものぢや無い。」

と「ル」卿は云つた。

「よくわかつた。實に恭けない、余は日本を代表して閣下に感謝する。」

と子爵は謝した。

「ときに、貴君は米國に滞在中、何處に居を占められるか。」

と「ル」卿は問ふた。

「余は諸種の關係上紐育に滞在しようと思ふ。」

と子爵は答へた。

「それが宜い、貴君が華府に居られて、余と屢々會見するとあつては妙でないから、

紐育が最も適當であらう、若し用事があつたら、余の方からお報らせしよう。」

と「ル」卿は云つた。

應酬種々あつて、子爵は使命遂行の根據地として紐育に居を占めた。

實に持つべきものは親友である、親友に内外の別は無い。この一會見ほど子爵の心を慰め日本を利したものは無い。昨日まで前途の程を危ふみ、帝國の不幸をかなしみ我身の成功を悲觀した子爵は、今日は前途を樂觀し、帝國の幸福を喜び、我身の使命の可能を見ることを得た。一夜の裡に情況は一變し、悲觀より樂觀となり、不元氣より元氣となり、希望の光りは燦然としたのである。

けれど、如何なる形式により如何なる手段によつて使命を果すことが出来ようか、

「ル」卿は秘密の同情者であるけれど、「ル」卿の斡旋を待つことは表面では出来ない。

何處までも「ル」卿に迷惑を及ぼさず、事に成就せしめなければならぬ。

(著者曰く)二十年前の米國は斯の如く日本の同情者であり且つ「ル」卿は最も日本の同情者であつた。

然るに二十年後の今日はどうであらうか、兩國の感情は甚だ面白くないのみならず日米戦争までも口にするに至つたのである「ル」卿の如き日本了解者は最早出ぬであらうか。

九 所謂武士道

國際聯盟といふものを編み出して、ともかくも聯合國に加盟したウイルソンといふ大統領も偉らい人物であらう。華府會議を開いて英國を始め五ヶ國の海軍を制限したハーディングといふ現代の大統領も賢い人であらう。「ル」卿の後に出了たタフトといふ大統領も偉らい人であつたであらう。殊にウイルソンやハーディングは世界戦の後始末やらなにやらで、有名となつた人であるが、包まず申さば日本の了解者ではない彼等はむしろ日本につらくあたる人物である。それが彼等の本心かどうかは知らぬが日米兩國の感情が今日の如く疎隔したのは、日本の行動も悪るからうけれど、米國爲政家のよろしからざる故が大にあることは争はれない。

固より米國は米國の爲めに計るのが當然ではあるが、日本との關係を險惡ならしむるやうなことは必ずしも米國の利益を向上するものではない。これを思ひ彼を考へると、二十年前の「ル」卿ほど日本を了解し日本と米國間との親睦に資した人は他に無いこれは悉く「ル」卿の人格の力である。

然り「ル」卿の崇高なる人格の力であつた。

金子子と「ル」卿との會見は其後屢々行はれた。

或時「ル」卿は子爵に向ひ、

「今回の日露戦争を機會に余は日本に關する書物は大抵讀んで、大に日本の研究を爲した積りであるが、たつた一つ充分に了解することの出来ないことは、日本の武士道といふことである。この武士道の眞義を了解することは甚だ困難であつて、何分にも適當の書物が見付からないが、何か良い書物はあるまいか。」と問ふた。

「それは日本の學者で新渡戸稻造の著した英文武士道といふ書物がある。」と答へ

た。

そこで、子爵はこれを日本大使館に計つたら、幸ひ數部を得ることが出来たので、これを「ル」卿に奇贈した。卿は大に喜んだ。

其後數日して會見の節「ル」卿は、

「先日は英文武士道を頂いて有難う。よく讀んだ、これで武士道をよく了解することが出来た。で、余は四人の子供にこれを讀ませ其他に必要な友人に奇贈したのである子供に對しては、中に「天皇」といふ字があるが、米國は共和國であるから「天皇」といふものはないが、この「天皇」の字に「軍旗」といふ字を代用すれば最も適當であるといつて聞かせてやつた。」

といつた。

卿は日本研究に斯くも熱心だつたのである。そして我武士道の眞の了解者は卿であつた。日本が露西亞に對して戦争を開いたのは、武士道に基づくものであつたことも

亦、卿はよく知つて居つた。あれほど立派な人格を有する「ル」卿が、單に露西亞が嫌

ひで日本が好きだから、それで日本に好意を寄せるといふやうなものではなかつた。

彼は日本の武士道は即ち眞の正義人道であるから、それに基づいて開かれた戦争は即ち、「ル」卿の好意を招く原因であつたのである。

前に既に述べた如く、露西亞人の米國に於てする宣傳は、飽くまで日本を罵詈雑言した醜惡のものであつた。愚民を迷はし其場當りの氣勢としては、或はその手段も有力であるかも知れぬ、されど、さういふ下らない宣傳によつて日本に惡意を有つやうな米國人が居つたら、それは少しも日本の苦痛とする所ではない。そんな低級な人間ならむしろ同情は必要でないのである。

眞に常識を有し、眞に正義人道を解する人であるなら、斯かる輕佻浮薄な宣傳を信ずる筈はない。金子子にして所謂暴を以て暴に酬ゆるの筆法に出るならば、恐らく百の子爵ありとも恐らく、眞の日本の同情者は一人も米國にては得られぬであらう。

然り、子爵は實に茲に注意したのである。

子爵が始めて紐育に於て演説をしたとき、恰も旅順に於て露の海軍長官マカロフ中將が戦死した噂の高い時であつた。子爵は日本が眞に已むを得ずして露國の挑戦に應じたことを説き、最後に、

『今回露西亞の海軍長官マカロフは戦死せられた。同長官は露西亞第一の海軍戦術家であると共に世界的に有名な將軍であつた。日本は勿論米國の海軍と雖も同長官によつて智識を得たことは決して少くはない。これを日本から見ると或は此上なき幸福といふかも知らぬが、日本人は決してマカロフの戦死を喜ぶものではない。少くもこの金子は世界の爲め露西亞の爲め實に彼の死を惜しむものである。恐らく日本陸海軍の將校も亦余と同感であらう。』と附け加へた。

ところが、その武士道的態度を加味した一言は、ひどく米人聴衆を感動せしめ、露

人の罵詈譏に引き換へ、日本人金子子爵の男らしき態度に非常なる武士的道義を見出して、其の人氣は忽ちにして集まつたことは、蓋し想像するに難くないのである。

第一回の演説は斯くの如く大成功であつた。それを初めとして、子爵の演説は到る處同情を以て迎へられ、斯處からも此處からも口演して呉れよとの招待は櫛の齒を引くが如く、やつて來た。

大統領の好意によりて、曾て學びの窓であつた「ハーバード」大學で演説したときには、聴衆は痛く感動し、子爵の爲め一種の後援會とても云ひたいやうなものを作つて呉れた。其の口演は常に米國の新聞紙に掲載せられ、これによつて、日本が眞に已むを得ずして戦争をするといふことは、大半了解を得るに至つたのである。眞に公平な判断をする者である限り、日露戦争の原因が露國の横暴と日本が眞に安危の瀬戸に立てることを解せぬものはないのである。

これが即ち武士道の眞髓であつて、即ち正義人道の本體なのである。其故露國流に

鐘太鼓を以て旗行列の示威運動を催ほす必要なく、極めて地味に着實に以て其の目的を達することが出来るのである。

一〇 連戦連勝

時日は次第に経つて行つた。

兒玉大將は五分五分だ、それを六分四分にしようと思つて、苦心をして居ると云つた。山本海相は終局には勝つ、而かし軍艦の大部分は失ふと云つた。これを加へて平均すれば、とにかく漸く勝利と名の付くものには至るであらうといふに過ぎない。

六回勝報が来て四回敗報に接する、これは固く信じて米國に來た子爵である。ところが海軍は着々として襲撃の目的を達し、陸軍は鴨綠江附近の第一戦に大勝を博し次いで金州南山を占領し得利寺に大勝を占め、更に三十七年九月には第一作戦目標たる遼陽を奪取し、其間一度として日本軍の敗北に接したことはない。

「それだから日本が勝つのだ」
とは米國上下の一致する議論であつた。

もうかうなるぞ、十中八九は同情は日本のものである。どんな巧妙な宣傳をしても又同情者があつても、敗戦では何の効果もないものである。況んや斯かる場合に如何に上手に外交をしても、背後に勝利がなかつたら、それは砂上の樓閣に等しい。外交は戦勝によつて成功するものである。

旅順が陥落した、奉天戦闘で最早大勢は定まつた、次いで日本海海戦で愈々日露の位置は定まつて了つた、旅順が陥落した頃には、米國の同情は九分九厘まで日本のものであつた。實に日本人は所謂大モテで、金子子の演説は到る處狂熱的に歓迎せられ、最早其の使命の大部分は成就したのである。しかし、子爵はこの一年以上の日子を、それは人知れぬ苦心をしたのである。假令大統領の好意があつたとは云へ、今日の如き結果を得るに至つた筋道には心血を吐くやうな苦しきはあつた。

しかし日本を出發するときは、十中の九分九厘失敗であると覺悟した彼が、今や九分九厘の成功を贏ち得たに至つては、何とも今昔の感に堪へないものがあるのであらう。

外交の背後には有力なる軍備を必要とするといふことは、昔も今も變りはない。獨逸はこれを悪用したから世界を敵としてたのであるが、正義の下に之れを行ふなら、軍備といふものは決して今日の如く變なことをいふべき意味合のものではない。殊に戦時に於ける外交は戦勝がなければ、絶対に成功するものではないのである。

既に金子子爵が米國に於て、つくづく感じたことは、實に適中して居るのである。如何に露西亞が日本の事を罵詈譏しても、自己の軍隊が滿洲の平野で見苦しき敗北を爲しつゝあつては、何人もその大言壯語に耳を傾けるものは無い。金子子が地味に着實に聲を低うして努力しても、滿洲の戦場では着々として戦勝を擧げつゝあるから其の言ふ所は人々から眞實を以て迎へられるのである。

嬉れしかつたであらう。

『私は諸君に向つて、いつか感謝しなければならぬと絶えず考へて居りましたが、二十年後の今日而かも紐育に到着して忌はしき光景に悲觀した三月二十五日、その記念深き日に於て諸君にこれを語り得るは實に光榮とする所であります。』

と子爵は先般語られた。

よく勝つて下された。勝つて下されたばかりに米國の同情は確定的に日本へ寄つて來たといつて感謝されたのである。

よくない例かは知らぬが、支那などは實に外交は巧妙である。巧妙ではあるけれど彼の背後には列強を恐れしむる程の強力な軍備が無いから、多くの場合列強によつて黙殺されて了ふのである。日本などは外交術は模範的に拙劣であるが、これまで相當なる軍備があり戦勝があつたから、相當なる成果を擧げて來たのである。されば拙劣なる外交を助けて國家の利益を維持増進しようとするには、どうしても後援たる

強大な軍備と戦勝とがなければならぬ。今日軍備縮少の聲を聞くが、然らば日本は外交術に於て上達したかどうか。

さて物語は思はず議論に入つたが、日本軍が満洲の野に於て、海上に於て連戦連勝を博するの報は、續々として米國に傳へられ、其都度日本への同情者は子爵を中心にして祝福して呉れた。

子は軍人の讀法を翻譯してこれを有志に分配したり、有ゆる手段を盡した。よいとなると何から何まで良くなるもので、さういふことが悉く彼等の同情を惹く原因となつた。其の間彼と「ル」卿との間には屢々會見が行はれ、「ル」卿の公平なる盡力によつて、明治三十八年の春には、全米國の同情は大部分日本の上に注がれたのである。

子爵が或會席の時に軍人諸君に感謝すると云はれたのは、實に茲である。日本が露國に勝ち得たのは、陛下の御稜威が然らしめたと共に日英同盟の力があり、且又米國

の好意に待つものが甚だ多い。今日に於ける米國は兎も角も吾人日本人は日露戦役に於ける米國の好意を忘れることは出来ないのである。

或時大統領から、子爵に會ひたいといつて來た。て、子爵は其の翌日紐育を發し華府の白聖館に「ル」卿を訪ねた。通されたる應接室に「ル」卿は非常に忙しさうであつたが、子爵に向つて曰ふには、

「吾輩は明日から「ダゴタ」地方へ旅行しようと思ふ。其の目的は猛獸狩りであつて十日間ばかり不在になる。この不在中は如何なる人が吾輩に用向きがあつても、一切之れに關係せぬことにして居る。しかし、この「ル」ズヴェルト」に對し日本の爲めに必要であるといふ事柄であるならば、その例を破つて何時でも歸つて來る、その際は一應吾輩に用事があるといふことを副大統領タフトに話して、タフトから吾輩に手紙を呉れば吾輩何時でも歸つて來る。其故君にタフトを紹介して置かう。」といつて副統領タフトを紹介した。

猛獸狩は「ル」卿の唯一の趣味であることは、人のよく知る所である。後年彼は亞弗利加迄も出かけて行つた程だ。

一一 猛獸の皮

應接室の一侧煖爐の上の壁に、大きな寫眞の額がかゝつて居た。

副統領タフトは子爵にこれを指して、

「大統領は明日からあの地に行かれるのです、あの猛獸を撃ちに……。」と説明した。

見ると、その寫眞は無数の熊群が鬱蒼たる大森林の中から悠々と歩き出て居る所の畫であつた。

「なんだ、熊狩りか。」

と子爵は思はず聲を出した。

「然り熊狩りだ。」

と「ル」卿はいつた。

「閣下にして熊狩りに行かるといふことなら、余は中止せられんことを友人として勧告する。」と子爵はいつた。

「そりや又何故だ？」

と「ル」卿は變な顔をして居る。

「だつて、閣下、よく考へて御覽なさい。他の猛獸例へば虎とか獅子だとかいふなら兎も角、熊は露西亞の徽章ではありませんか。この大切な際米國の大統領が露西亞の徽章たる熊を撃ちに行くと云ふのは、甚だ穩やかならんことだと余は思ふ、餘り皮肉過ぎて、而かも中立國の元首の所爲として……。」

と子爵は説明した。

これに對して「ル」卿は何と答へるかと思つたら、これは又ザツクバランに、

「真に其通りだ。露西亞の徽章は熊である。包まず申さば、吾輩はその〇〇〇が討ちたいのだ。けれどそれが出来ないからせめて熊でも撃ちに行かうとするのである。それに不思議があるもので無い。折角親友の勸告ではあるがこれには應ずることが出来ない。」

といった。

タフトも子爵も沈黙した。

この一言は「ル」卿が不正なる露國を如何に憎んで居たか、如何に正義に與みする心に強かつたか、實に其の面目の躍如たるものがあるのである。〇〇〇が撃ちたいけれどそれは出来ないから、せめて熊でも撃つて〇〇〇を撃つた氣持にならうといふのだ。日本はこの「ル」卿の好意に對して何を以て酬ゆるのであらうか。

斯くて「ル」卿はその翌日「ダゴタ」に向ひ出發した。そして約十日は間もなく過ぎた或一日會ひたいとの通知は金子子に達した。

「いや、昨日吾輩歸つて來た。」

と「ル」卿は子爵に挨拶をした。そして、

「今回は實に意外に獵が多くて、御覽なさいこの通り多くの熊がとれた。」と指し示した。

見るに大きな熊ばかりが十ばかり皮になつて、横へてあつた。

「それはお目出度う。時に閣下に一つお願ひがありますが、實は其の熊の皮一枚を頂戴したいものである。」

と子爵は尋ねた。

さうすると、「ル」卿は言下に、

「外ならぬ貴君の事であるから、進上することは何でも無いが、實は今回のみならず一つの猛獸狩に於ても、吾輩自身で撃留めた猛獸の皮は何人にもこれを贈つたことは無い、否これを寄贈しないことに定めて居る。其故洵に遺憾乍ら貴君にも進上するこ

とは出来ない。』
 といつてこれを断つた。

『然らば致方は無い。實はこの熊の皮を一枚頂戴して、先日の物語りと共に他日歸國の曉これを余の天皇陛下に献上したいと思つたので、申出た次第である。』

と子爵は内情を打明けた。さうすると、

『一寸待つて呉れ給へ、先日の物語と共に君の皇帝陛下に献上するとな。よし、よくわかつた。然らば吾輩は前例の除外例を設けて、一枚貴君に寄贈することとしよう。此の中で一番大きな上等の皮を差上げよう。貴君が任果て、歸國せられる迄に十分よくナメして、硝子で眼なども入れて立派にして置くから、どうか持ち歸つて陛下に献上して呉れ給へ、これは吾輩更めてお頼みする。』

と「ル」卿は態度が改まつた。
 『有難う、それでは御好意に甘んじて頂戴し他日陛下に献上しませう。』

と子爵も誠に本意を遂げたやうな思ひがした。

其後即ち日露戦争が終つて、「ル」卿の幹旋で平和克復した後、疊二枚敷もあるやうな大きな熊の皮はよく軟めされ、硝子の眼も入れられて、「ル」卿の手から受けて、子爵は歸朝の後これを陛下に献上し且つ當時のことを委細奏上した。陛下の御悦びは大したもので、この熊の皮は一層お氣に召したと見えて、其後御學問所の御室に敷かれ、崩御の砌に至るまで御賞翫ありじやに洩れ承るのである、今日その皮は如何にしてあるか固よりこれを知ることが出来ないが、先帝明治天皇には「ル」卿の好意を深く感激あらせられ、この深長なる物語の主人公たる猛獸の皮を御座に近く召させ給ひしことは、誠に偶然ならぬことであると思ふのである。

一一一 媾和の幹旋

明治三十八年一月一日旅順の堅城は、日本兵の忠勇奮闘に依りて陥落し、次いで三

月には奉天大會戦が開かれて日本軍の大勝に歸し、更に五月下旬には波の艦隊は日本海に東上して、茲に一大海戦は開かれ、其の結果露國の艦隊は全滅し、ローゼストウキンスキー提督は日本軍の俘虜となり、日露大戦の勝敗は先づ日本軍の大勝となつて一段落ついたのであつた。けれど、「リウネウイツチ」大將は更に代つて露國陸軍の總司令官に任ぜられ、今後の會戦によりて、日本軍を撃破せんことを企圖しつゝあつた。

大統領ルーズヴェルトは、金子子爵を官邸に招きて、

「最早日本は克く戦争の目的を達した物と吾輩は認める。此上の戦争はこれを望む所ではあるが日本としても露西亞としても否世界としても望む所無いと考へるから、吾輩は茲て兩交戦國に對して媾和を勸告しようと思ふが、貴君の御意見はどうであらうか。」

と問ふた。

「至極結構であると思ひます。」

と子爵は喜びに満ちた聲で返答した。

「然らば、この勸告状を兩交戦國へ送らうと思ふが、貴君の御意見は如何であらう。」

といつて、勸告状を子爵に見せた。

子爵はこれを読むと、實に周到に出來て居る、これなら兩交戦國共に不服はあるまいと思はれるほどであつた。

そこで、大統領は媾和談判を開く場所は何處がよからうかとの問題について、兩人の間に押問答が始まつた。海牙はどうであらうか。海牙には露國皇帝の主唱の下に平和殿が建ててある。而してその建物は露西亞に深き因縁を有して居る。日本は今や戦勝國であるから本來からいふなら、敵をして城下の誓を爲さしめなければならぬ、さすれば、斯かる遠方面かも露國の勢威の影を宿して居る海牙迄態々談判使節を出すや

うなことは潔しとせざる所であらう。さすれば海牙は不適當である。然らば山海關が芝罘邊ではどうであらうか、これも恐らく適當ではあるまい。然らば兩國戦線の間若くは其附近にして、奉天と長春との中間地ではどうであらう。それでは兩交戦軍の休戦中にあるものが、逐一談判の経過を知つて、必ずや事穩やかに濟まぬことになるであらう。

彼是と研究した結果、何分にも適當の地が無い。「ル」卿もこれには當惑の體であつた。そこで金子子は、

「海牙だの山海關、芝罘などと云はずに、一その事媾和會議の地を此光榮ある米國の一地に選ぶがよいではないか、私はそれを最も適當だと信ずる。」と主張した。

さうすると大統領は暫らく頸を傾けて考へ込んで居たが、やをら口を開いて、

「いやその事について考へないではないが、吾輩が媾和を勸告して置いて、その會議の場所を米國內に選ぶといふことになる、いかにもこの「ルーズヴェルト」が功名

を銜ふやうで、世界に對して面白くない、これはどうしても米國以外の地に選ばなければならぬ。東京か支那の北京かはどうであらう。」と遠慮をして居た。

「なぜそれが功名を銜ふことになるか。私は米國內に選ぶことを以て最も至當と信ずるのである。抑々米國は「デヨーデワシントン」以來世界的に有名な國家であるが、さて「ワシントン」卿の獨立戦争を始めとして、南北戦争だつて、これ等は決して世界的の事業ではなく、悉く米國々内の變亂に過ぎない。若しも閣下に於て日露の媾和を斡旋し、これを米國に誘ふて平和克復をさせる事が出来たならば、それこそ米國は始めて世界的の事業を爲した事になりはせぬであらうか。而して其の光輝ある事業が余の友人たる「ルーズヴェルト」卿によつて爲されることは余の最も熱望する所である。余は閣下の友人としても切にこれをお勧めするのである。」と子爵は力説した。この勸告はしたゝか「ル」卿の心を動かした。眞に兩國の爲めを思ひ、平和の爲めに

貢献するの功名を銜ふ云々の事は斷じて無い。卿も亦大にこれに鑑み、遂に意を決して媾和談判の場所を米國太西洋沿岸なるポーツマスと爲し、兩國に對し勸告狀を發したのである。

幸にして兩交戰國は「ル」卿の斡旋に應じ、三十八年夏先づ休戰條約の締結となり、次いで兩國媾和全權大使は米國に集まつた。日本の大使は故侯爵小村壽太郎氏にして其當時は外務大臣で男爵であつた。露國からは「ウイツテ」が大使となつて、兩使節はポーツマスに折衝を重ね、屢々破裂せんとしたが、幸にも大統領の斡旋のお蔭により、茲に日露の間は再び平和克復となり、兩國陸海軍は各々交戰地より撤退し、日本陸海軍は曠古の戰勝を博して冬頃より翌年にかけて續々凱旋した。五分五分六分四分の成績は先づ七分三分を以て終局した。これは事實に於て日本の全勝とは云はれないのである。

一二 日本は今後の使命

小村男爵が媾和全權大使として、米國に來るやうになつて見れば、金子子は最早其の任務を終へて用のなき身體となつたのである。子爵の今日迄の奮闘によつて、日本は全米國の同情を十二分に得て居る。一方忠勇なる將卒の奮戦によつて戦ひは勝利を得て居る。媾和談判は多くの場合日本に最も有利なる條件を以て進捗することであらうと思はれた。

愈々小村大使は米國に到着した。子爵と大使との會合に於て、子爵は即刻日本へ歸國したいといつた。けれど大使の切なる要求によつて、遂に談判終結まで米國に滯留することとなつた。

談判は幾多の危機を生じ、容易に平和克復になることも思はれなかつたが、「ル」卿の斡旋その宜しきを得た爲め、目出度く日露間の國交は復舊せられ、日本は樺太の南半

部の讓受と遼東半島の租借權繼承並に滿洲鐵道の占有とを以て満足せざるを得ざる
こととなつたのである。

いよく歸朝の途に上らんとした子爵は、一日白聖館に大統領を訪問し、永い間の
好意を謝して例の熊の皮を貰つて退出したが、其の際子爵は大統領に向ひ、
『日露戦争には御承知の通り勝利を得たが、我が日本の今後の場は蓋し益々繁多に
なることであらうと思はれる。而して日本が今後如何なる態度方針を取つて進んで
行つたらよいものであらうか、参考の爲め閣下の御意見を洩らして頂きたい。歸朝の
後 天皇陛下に奏上するとき、閣下の御意見も共に 陛下に奏上したいと思ふ。』
と問ふた。さうすると「ル」卿は、

『よく聞いて下さつた。然らば忌憚なく愚見の存する所を述べらるであらう。日本は今
後世界的に大を成すであらうが、今後の使命は自ら重大であつて、恰も我が米國が新
大陸の先覺者として新大陸を指導するの使命を有すると同じく、日本の今後は亞細亞

の盟主として有色人種を救済し、所謂亞細亞は亞細亞人の亞細亞たることを確實にし
なければならぬ。スエズ運河以東即ち亞細亞の何れの土地に對しても歐洲人から一指
をも染めさせてはならぬ。これが今後の日本の使命であると考へる若しも日本の主權
者 陛下に於かせられて、余ルーズヴェルトの意見と同様であるならばどうかそれを
實現すべく努力して頂きたい、それが爲めに必要とあれば、余「ルーズヴェルト」は
犬馬の勞を致すに吝なるものでない、』
と、實に堂々たる意見を披瀝したのである。

誠に「ル」卿の卓見は敬服の外ない。排目的野心が何處に見られるか、亞細亞の利權
横取的野心が何處に存在するか、眞に是れ公平なる聰明なる大人格的意見である。

『有難く存ずる。委曲これを 陛下に伏奏するであらう。して、只今の御意見は米國
大統領ルーズヴェルト閣下の御意見として發表してもよろしいでせうか。』
と子爵は感謝し且つ問ふた。

「いや、待つて下さい。その意見を世界に発表するといふことは何等憚る所はないが、今暫らくそれは待つて貰ひたい。唯貴君がこれから日本に歸へられて、これを陛下に奏上せられ、又爲政治家に開陳して將來の國策の上にこれを利用せられる分には、一向差支はないが、公式にこれを發表することは今少し待つて貰ひたい、何れ余自身によつて何等かの形式を以てこれを世界に發表する時機が來るであらう、それまで待つて貰ひたい。」との事であつた。

子爵は歸朝の後これを陛下に奏上したのは申す迄もなく、夫々これを時の爲政治家に開陳したことも事實である。けれど、「ル」卿の發表は一年二年と延引された。

固より「ル」卿の發表が有らうが有るまいが、日本としては其の方針に基づきて進まねばならぬことは勿論である、こんなことは「ル」卿の意見を聞くまでもなく何人も知つて居る所であるが、利權に重大なる關係を有する米國の元首が、少くも斯かる大意見を有することを知る丈けでも、實に世界的の公義であることがわかるのである。

而して日本は日露戦争以後果してその大使命に向ひ進みつゝあるであらうか。「ル」卿に對して面目があるであらうか。

「ル」卿の發表は遂に實現せられずに、愛敬する卿は數年前逝つて仕舞はれたのである。若しも今日迄卿をしてあらしめば、卿は「ウイルソン」の國際聯盟やハーディングの華府會議を何と見るであらうか、日本の近來の墮落を見て何と評せられるであらうか。

若しも「ル」卿の意見が發表されたら、今日の世界はこれを何と評するであらうか。少くも米國自身は何といふであらうか。今日の日米間は日露戦争當時の日米間ではない。否今日の日米間は「ル」卿在職中の日米間ではない。これを見彼を思ふと、吾人は故ルーズヴェルト卿の人格の偉大なりしこと並に眞の日本の了解者であつたといふことを痛切に感じ且つ卿の死が早かつたことを惜しむものである。

第二章 猛分隊長

一 赴任の途中

私は二十年前の戦争に満洲の戦場に出征して、明治三十八年の六月に聯隊旗手から第九中隊の小隊長に轉出した。それは唯の一度でよいから一小隊を率ゐて、敵と鞘當がやつて見たいといふ情願から、強いて聯隊長にお願ひして、旗手を免じて貰つたのである。

私が第九中隊の小隊長となつて、聯隊本部を後にして前哨に任じて居る第三大隊の陣地を尋ねて出發したとき、今まで世話をかけた從卒（今日はそんなものは無いが、其の際は眞實の弟よりも大切なものであつた。）に別れるときはお互ひに泣きの涙であつた。彼は或峠を越えるまで私を送つて呉れ

て、其處でいよく別れたのであるが、其の峠から第九中隊の位置まで行くには、約一里ばかりも距離があつた。

軍用行李や其他の持物は、今朝第三大隊に歸へる大行李の駄馬に托して先きに送つて置いたので、私はたつた一人で狭い道路を、地圖に照らして見ては辿つて行つた。一里の道程はさほど遠いとは思はぬが、この一時間の獨りの旅は、私に種々の事を思はせた。

今朝まで情深い聯隊長や深切な聯隊副官に可愛がられて來たが、只今から見も知らぬ中隊へ行つて、中隊長や他の小隊長又私の部下となる小隊の下士以下全部とよく知るやうになるには、随分時日を要する事であらうと思ふと、今更ながら悲しいさびしい感じがした。先刻別れた從卒の岡田伊勢吉は、これから所屬の第三中隊に歸へることになつて居る。彼の將來の幸福も祈らなければならぬ。が、これから中隊に到着して、定められる從卒は何といふ兵卒であらうか。

そんな事を考へながら行く裡に、私の眼前には廣い野原が展開せられた。今私がこの高地を降れば下には第三大隊の陣地があるのである。北方遙かに見渡せば、藍色をした山々が連つて居る、其處は敵の兵の居る所である。とりとめもない聯想を浮べながら、山を下つて行くと、突然、

『〇〇少尉殿ッ。』

と叫んで、道路の脇から飛び出した者がある、見るとそれは一人の軍曹で、軍服も帽子も汚れ切つて、黒鬚蓬々とした鬼とでもいひたいやうな下士官であつた。

『おいッ どうしたんだ。』

と私は少々驚いた様子で問ふた。何といふ下士官やら一度も見ることがない。

『あゝよかつた。今朝から少尉殿の御出でになるのを此處で待つて居ました、あゝ嬉しい、さあ何でも持つて上げませう。』
といふ。餘程何かいはれがあるらしい。

『まア、持つて貰ふものは無いが、全體お前は誰だ。何故嬉しいのだ。』
と私は訊いた。

『あゝ、そりや失禮しました。自分は歩兵軍曹森半次郎であります、自分は第九中隊の第二小隊第一分隊長でありますが、今度少尉殿が第九中隊の小隊長になつて、お出でになるつて事を承り、それが……第二小隊長におなりなさるといふことに定まつたんです。私は實に嬉しいのです。畜生太田の奴め……様ア見上げれッ。』
といふ。

『あゝさうだつたか。それでは大に御厄介になるわけかな。時に太田の奴つて何の事だ。』

と私は答へ且つ問ふた。

『あはゝゝゝ、どうせわかる事ですからお話しします。太田といふのは士官勤務の特務曹長で太田進五郎といふ人のことです、此人は新兵時代は同年兵で仲よくやつて居

たんですが、自分は學問がありませんので、萬年軍曹太田は猪口才があるもんだで、特務曹長になつて、奉天戦後内地から補充に来て、所もあらうに第二小隊の小隊長に來たんです。初めは自分も大に喜んでみたのですが、昔とは打つて變つて、自分を袖にする目の上の瘤にする、何一つこの第一分隊長に相談せず、外の分隊長はつかりに相談をして、事を定めるのです。それぢや自分も甚だ氣持が悪いので、甚だ濟まぬわけだが、少々ダレてやつたのです。其以來此分隊長と太田小隊長との仲が折合悪しく中隊長のお耳にも達した様な次第ですが、今度少尉殿が第九中隊に來られ、第二小隊長になられることになり、太田は第三小隊長にすり下がります。これで自分も厭な思ひをせず、今日からは元の森半次郎にかへつて眞面目にやります。これで自分は旅順の決死隊に出て感状は二枚頂戴して居ます。人並のことはした積りですが、太田のやうな男の下では働かせぬ、どうか少尉殿ヤクダな森軍曹ですが、面倒見てやつて下さい、お願いであります。餘り嬉しくなつたので、今朝夜の明けるのを待ち兼ねて

此處までお迎へに參つた次第であります……。」

と長物語をして、涙をポロ／＼落して居る。

「いやよくわかつた。しかし太田の一件は乃公は聴かぬことにして置かう。乃公はあ見がけの通り漸く二十歳の青二才だ。まだ實戦の経験も大して無いから、お前のやうな戰場往來の老軍人のお助けを受けていなければ、充分なる働きは出来ないからよろしく頼むよ。」

と私はいつた。

「滅相も無いことを仰言る、どうかこの老骨をお引立て下さるやうにも願ひ致します。」

と軍曹は笑顔を作つた。

それから約千米の細道を何か話しながら行つて、やがて第九中隊の位置に着いた。中隊長や其他の諸官に挨拶をして、私は第二小隊長を命ぜられ、森軍曹は第一分

隊長であつた。申遅れたが奉天戦後は各中隊の小隊長は十人の中九人迄は特務曹長の出身將校若くは一年志願兵出身の中少尉が小隊長をして居て、士官學校出身の小隊長は殆んどなかつた。私が第三大隊の小隊長になつてから、士官學校出身の小隊長としては私がたつた一人であつた。そんなことも好奇心に驅られた下士卒の喜びの一つであつたことかも知れぬ、申兼ねる次第だが。

二 吾はこれを知らず

第一線に到着すると、私は其の翌日から四日交代を以て小哨となつて、中隊の位置から約千米の前方に出る事となつた。この四日間に於て私は部下の全小隊をよく知ることが出来たのである。

私は最古參(大隊に於ても最古參)の森分隊長に、何事も相談をかけて、歩哨線など巡回する際は必ず彼をして留守番をさせた。彼は學問こそ無いが、幾多の經驗を

もつて居るので、小哨長代理としても少しも不充分ではなかつた。勉めて古參軍曹の面目を保たせ、出来る丈け其の心を和らげるつもりでやつたのである。

森は何事もよく立働いた。何故前小隊長が彼を袖にしたか了解に苦しむ程であつたからして偏頗の處置を除き、夫々階級新古の別を明らかにしてやつて行けば、その間に故障の起る筈は無いと思つた。私がそれを勉めて居るといふことは森もよく知つて居た。

第一回の小哨はそんなことで期が満ちて、一先づ中隊の位置に歸へり、第三小隊と交代した。それから私は中隊長から種々なことを聞いたが、其中に森の扱ひには大に注意を要するといふことを言ひ渡された。

それから數日後第二小隊は再び小哨に出た。そしてこの四日間計らずも一事件が起つた。それは、近來支給される副食物が甚しく不良で、健康保持にも適當でないと思はれるほどのものだつたので、或時私が、

「どうもこんな給養ぢや警戒勤務に精力も何も出やしない、どうだ森軍曹、一つお前の考へはないか。」と私は大した問題ではなかつたがそんなことを話しかけた。

「はい。一つ獻立をさせようか。」

と彼はいつた。

「よからう、お前の處置に任せよう。」

と私がいつた。

さうすると、夕方になつて三人の兵卒が大きな小牛位の豚を持つて歸つて來た。

どうしてそんな豚を持つて歸つて來たかとは尋ねる丈けが野暮で、それは斥候に出るものが徴發して來たものである。その徴發して來たものが正當なる徴發をしたのか不正當なる徴發をしたのかは、給養の粗悪が小隊の精力を増進するか衰退するかの問題と對稱する、言葉を換へて申すなら、支那人否滿洲人の豚一匹を不正當に徴發した罪が高いか、これによつて警戒勤務に服する第二小隊の元氣が増進し、有力になつた

とすればその方の利益が高いか、問題は唯其の比較に存する。糧に敵に依るといふことが要務令に書いてあるが、これも詮じ詰むれば、食はずには働けないから食ふものを持たなければ敵地で求めよといふのだ、否出來ることなら内地から物資を仰がずに敵地で物資を得ればそれが理想的である、要務令はこの邊の事をいふものであつて、その得やらの善悪については責任者がありさへすればよいのである。

若しも豚一匹の徴發が悪いといふことであれば、その責任は小哨長たる私が負ひさへすればそれでよろしい。なんぼ私が青二才でもその位のことには心得て居る。只それまでの面倒な問題を惹起しさへしなければ最も結構である。

とにかく斥候兵は大きな小牛のやうな豚を一匹擔いで歸つて來た。森軍曹は直ちに指揮して前の谷間の細流に持つて行つて、皮や骨などは綺麗に流して了つて、紅白色の旨さうな肉を各分隊に分配し、臆て頬邊の落ちさうな旨肉が私の前に持出された。私は久しぶりに小哨の兵と共に美味しい夕食を喫したのである。

午勞の乾したものの壓搾したのや、海若菜のやうなものばかりでは、榮養不良に陥つて十分な活動は出来ない。時にはこんな榮養に富む獸肉を食はないと初夏の滿洲同様青くなつて仕舞ふ。

『大によかつた。森軍曹上出来く。又頼むぜ、甚だ結構だつた。』と私はいつた。
『そんな事なら譯はありません。』
と彼は答へた。

斯くて長い一日も暮れ方となり、小哨も晝の姿勢から夜の姿勢に變へなければならぬ、誰彼は第一下士哨へ、誰と誰は第二複哨と俄かに賑やかな役割が始まつた。夕食を済まして巻煙草をくわへ、前哨中隊から持つて来た日附遅れの新聞を讀んで居ると私の前へ三人の滿洲人が現はれた。

『何だ、何の用事があるのか。』
と私はとがめた。

三人は私の脚下に拜伏してから、

『大人。貴君の部下の日本兵は、今日午過ぎ吾々の部落蹄家堡子に來つて、この者の所有の家猪一頭を射殺し、これを盗み去りました。家猪は吾々の財産であるから、相當の代價を拂つて頂かなければなりません。此者は家猪を賣ることをさへも同意したのではありませぬが、日本兵は何の斷りもなくこれを射殺して、吾々の言ふことに耳も傾けずに去つて了りました。どうか仁慈なる日本大人の御裁斷により、相當な代價を頂き、今後斯かる強盜的行爲のなきやうにして頂きたいと思ひます。』

と其の惣代らしい口髭の生へた男が喋つた。
私は何も返辭をせず黙つて聞いて居た。そして彼等は言ひ畢つて、しきりに私の何かいふことを待つて居るらしい。が、私はそれを聞いて了ふと又新聞を讀み始めた。

『如何で御座いませう。』

と彼は又催促した。

「吾不知。」と私は一言いつた。

「知らぬといふ法がありますか、貴下の部下の日本兵がしたことです。」
と彼は不平らしい面付をした。

「吾不知。」私は今一度これを繰り返へした。

「それでは八子師團司令部に訴へますぞ。」

と彼はいつた。

私はその一言を聞くと、靴を上げて彼奴の額に孔もあけよとばかり二三回蹴飛ばした。驚いたのは彼等で、飛ぶが如く去つて了つた。

三 小哨長

日本大人は紳士的であつて、これに訴へ出さへすれば必ず相當なことがして貰へる

と彼等は考へたのであらう。けれど彼奴等の言ひ分は最初から癪に觸つて居る。のみならず最後に師團司令部へ上告するとの一言は私の感情を害すること夥しかつた。

私は彼を蹴飛ばした。見て居る小哨の兵さへも驚く程ひどく蹴飛ばした。これに失望し恐れをなした三人の士民は這々の體で逃げ出した。が、次いで起るものは師團司令部である。此頃からいふ徵發事件に關しては、嚴しい訓令が出て居る。で、若しも士民にして司令部へ上告したら、恐らく用事の無いのに困つて居る憲兵は、取調の爲めに小哨へ来るに相違ない。

來ても差支は無。吾々は俯仰天地に愧ぢざる徵發をしたのである。士民の金銀財寶を掠めたのでもなければ婦女を凌辱したのでも無い、高が豚一匹の事ではないか。

果せるかな第二日目の午後二名の憲兵は馬を飛ばしてやつて來た、一人は軍曹で一

人は上等兵。

馬を下りた二人は丁寧に敬禮をした後、私の前にやつて来た。用向は云ふまでもなくわかり切つて居る。これが小哨勤務でなくて、前哨中隊か又は其後方に在つて休養して居るときの事であるなら、私の態度も若干和解的であり又憲兵の態度は警察的であるべき筈であるが、何を申しても私は今や警戒勤務の重要な任を負ふて居る。小哨長としての職權を正面に取る上には聯隊長と雖自由には出来ないのだ。恰も風紀衛兵の歩哨がたとへ二等卒であつても一等卒であつても、歩哨としての職權からいへば門の出入は絶対に彼の權限によつて許され又拒絶せられるのである。

今私の目前に二人の憲兵が現はれた。言はずも知れた豚の一件の取調である。が私は彼等の取調には應ずるが其れが爲めに小哨としての動作を忽がせにすることは出来ない。

『少々取調の廉がありまして、參つたものであります。』

と憲兵軍曹は眞面目な態度でいつた。

『さうか。如何なる取調べかしらんが、その事なら三日の後小哨を交代するから、そのときにして貰ひたい。』

と私は答へた。

『いや、大した事でもありません。又三日間を猶豫することも出来ないのではありません。』

と彼は少々不平な顔をして居る。

『さうか。して、其の取調の件といふのは、此小哨長個人の私行に關することか又は小哨全體又は余の部下兵卒に關しての事か。』

と私は白ばくれて改まつてみた。

『小哨の或兵卒のことであります。實は昨晚此前方の篩家堡子の村民三名が、師團司令部へやつて來まして、此小哨の日本兵が豚を強奪したので、小哨長に相當の代價を』

請求したら、乃公は知らぬといつて靴で蹴られたといふ訴へをしたのであります。それで自分等は上官の命令に依り、其の事をよく取調べて歸へらなければなりません。ぬ。」

と、一本参つた積りの傲慢の態度を示す。
「うむ、確かに昨夕二人は此小哨へもやつて来た。彼奴等のいふことが都合だつたから乃公は蹴飛ばしてやつたよ。それで、君達は何人を調べるのか、どうして取調べをするのだ。」と私も随分皮肉に出る。

「小哨長たる貴官にお尋ねし、又必要なる兵卒につきてこれを訊問するのです。」と彼等はいつた。

「乃公に尋ねるといふことは、乃公が知つて居る範圍を答辯すること御同意することが出るが、君達が勝手に余の部下の兵卒を取調べるといふことは、それは誰の許可を得て来たのか。」随分皮肉だ。

「そりや必要なら、何人の許可を得ずとも取調べて差支ないと信じて居ります。」と彼はいつた。

「いやそりやこの小哨長が許さぬ。今此小隊は小哨として第一線に出て居る。その警戒の責任は擧げてこの乃公にかゝつて居る。その許しも受けずに勝手に取調べて、それが爲めに警戒が忽がせになつたら、其の時はたれが責任を負ふのか、君達が責任を負ふといふか知らんが、其の責任は君達では不充分なんだ。甚だ失禮の申し分がら。」

と私も少々聲が大きくなる。

「然らば貴官は軍事警察の取調を拒避せられるのでありますか。」と彼等も屹つとなる。

「決して拒絶はせぬ。だから三日後の交代まで待てと云つたのだ。」と私も屹つとなる。

「それでは、ともかく小哨長の貴官にも尋ね致しますが、此小哨の中に昨日豚を強奪したものはありませぬか。」

「恐らくあるまい。小哨は獨り此處ばかりではない、他の方面には第十中隊から出たものもある、取調は周到にして貰ひたす。」

「それはよく承知して居ります。恐らくあるまいつて、其れでは自分等も甚だ困るのであります。」

「困つたつて乃公の關する所では無い。恐らくあるまいと乃公は思ふのだ。若しあつたら此〇〇少尉が責任を負ふのだ。」

「そんなら、昨日の土民を伴つて来て、此兵卒の中でどの兵が奪つたのか見さしたら早くわかることだと思ひますが、それに御不同意がございますか。」

「小哨としての任務に缺くる所さへなければ差支は無。」

と私もとにかく今日を有耶無耶に過ごせば明日はどうにかなると思つた。

「そんなら、これから篩家堡子へ行つて、昨日の三人を連れて來ますから、護衛兵を四五名貸して下さい。」と彼等は要求した。

「その儀は斷じて御免を蒙る。小哨の兵はそんな種類の使役に充てるものではない。

君達がこれから前方に出るので、恐ろしいことがあるなら、後方の部隊から護衛兵を借りて行くが宜い、小哨の兵は一人たりとも君達の護衛に使用することは許さぬ。」

「憲兵は必要なら軍隊に對して援助を請求する権利があります。」

「馬鹿をいはんものだ。その権利は時と場合との事で、敵を警戒する大切な任務を帯びた部隊に對して、御自分等が危険だから護衛兵を貸して呉れよ要求したつて、其れが権利になるか、日本軍は敗れざる爲め、勝利を得る爲めには一人や二人の憲兵の生命には關係しないのだ。だから後方の部隊からお借りなさいといふのだ。但し、改めて申して置くが、この歩哨線の前方をうろくへたにやられると、歩哨が間違つて射撃しても知らんぞ。」

「私わたくしは嚇おどかしてやつた。」

憲兵けんべいはこの押問答おしもんたふは駄目だめだと思つたものか、取調とりしらべを中止ちゅうしして一先まづ歸つて了つた。

「小哨長殿せうせうちやうどの、萬歳ばんざい々々實じつに旨うまくやりました。」と大きな笑わらひを洩もらしたのは森軍曹もりぐんさうであつた。

四 責任の歸する處

憲兵けんべいが引ひき取つて後のち、森軍曹もりぐんさうは、

「なんだ、高たかが豚ぶた一匹ひきのことだ。まかり違ちがへばこの森もりが取つたといへば、それでことはすむ。感狀かんじやう一枚まい没收ぼつしゆうされると思へばそれで澤山たくさんちや無ないか。」と彼は大おほいに得意とくいである。

「へたに自分じぶんがやつたなんて、飛とび出だしちやいけないよ。乃公おれが出来できる丈だけけ白しろばくればやるから、まア見みて居かて呉くれ。」

と私わたくしは彼かれをたしなめた。

そこで、翌あした三日かみ目に早朝さうちゆうから、斥候せきこうを派遣はけんし、その一組ぐみの斥候せきこうは云いふまでもなく一昨日とひ豚ぶたを取りに行つた三名なみのものだつた。

「お前達まへたちは日没ひづれになるまで、歸かへつて来るな。」

と命めいじた。勿論もちろんそれが何なんの爲ためめであるかは誰たれも知しつて居かた。

そこへ、前哨中隊長ぜんせうちゆうたいちやうより、豚ぶたの一件けんに關くわんして昨夕さくゆふ憲兵けんべいが中隊長ちゆうたいちやうに會見くわいけんを求め、小哨長せうせうちやうの態度たいどが不親切ふしんせつであるといつて憤慨ふんがいして居かたから、本日ほんじつ取調とりしらべに憲兵けんべいが行つたら、親切しんせつにしてやつて呉くれ、さもなければ彼等かれらは益ますます疑念ぎねんを深ふかくするばかりだからといふ要旨えうしのことをいつて來た。

「おい、今日けふはいよ／＼證據人しやうこじんを連れて來るよ。」と私わたくしは部下ぶかに豫告よこした。

午前九時頃こぜんじゆうじこうの事ことであつた。昨日きのふの二人ふたりの憲兵けんべいは例れいの土民どみん三名なみを伴ともふて再びふたたび小哨の位せうせうのゐ置ちにやつて來た。

「誠に御面倒ですが、一應取調べさせて貰ひます。」と彼はいつた。

「よろしい。君達に毎日々々来られるところさくて仕様が無いから、思ふ存分取調べて呉れ。其代りに若しも此小哨内に強奪した兵卒が居なかつたならば、士民三名はこの小哨に對する責任者とし汚名を被せた悪者として、君達の面前に於て吾輩が日本刀を以て成敗して呉れるが、それは承知だらうね。」

と私 は交換條件を出した。

「いやそいつは少く困ります。」

「そいつは困るつて、日本軍に汚名を被せたことに罪が無いといふなら、それは片手落ちだ。それぢや憲兵といふものは日本兵の敵であつて、士民の味方だといふことになるがどうか。」

「よくわかりました。しかしそれは甚だよろしくありません。若しも彼等が間違ひを申しましたら、八家子へつれ歸つて相當の處分を致します。」

「さうか、それではその事は讓歩しよう。そこで、一同を取調べるとき實際奪りもせぬ兵卒を間違へてこれだなんぞといつたら、そのとき斬ればよからう、それは豫め御承知が願ひたい。」

「どうもそれは仕方ありますまい。士民が眞實をいふものとして其の生命は保持しなければなりません。眼前に於て偽りをいつたらそりや何とも仕方ありません。」

「その代り此小哨内にその兵卒が居ましたら其のときはどうなさいます。」
と彼は問ふた。

「わかつて居るではないか。そのときにはこの小哨長が命じてやらしたものととして、この小哨長が罰を受けるのだ。」

と私 は平氣で答へた。

此時迄側で黙つて聽いて居た森軍曹は、何を考へたものかスツクと起ち上り、

「そのときの責任はこの森半次郎がうけます、小哨長が……勿體ない……この森で澤山だ。自分が立派に受けます。」

と怒鳴つた。

「まア、お前は黙つて居れ。」

と私か之れを制した。

「まア、自分に云はして下さい。この小哨にないことは受合ひだ。若しあつたら……いや若し豚尾漢が嘘を一言でも云つたら、突き殺す役目と責任の役目とはこの森が請合つた。」

といひながら、小銃に劍をつけて頑として私と憲兵との間に突立つた。私も憲兵も誰も彼もこれをはねのけることは出来なかつた。

五 不思議な無罪

復哨や下士哨並に斥候に出されたるもの、外、休憩にある小哨の下士卒全部は先づ士民によつて、此中に犯人が居るや否やをたしかめられた。けれど勿論この中に當人の居る筈はなかつた。一通りそれを終るに今度はこの兵卒を以て歩哨線の交代を爲さしめ、第二回の取調が行はれ、第三回は斥候の歸還を待つて行はれたが、其等の中にもなかつた。例の三人組の斥候は、交代の爲め三人が出たが、歸還したときは一ぺん取調をうけた者の三人が素知らぬ顔をして歸つて来て、二度の取調を受けたので、遂に全員六十餘名の中には一人の犯人も出なかつた。

實に不思議な無罪であつた。

「實にこの通りです。」

と私は言葉まで改めて憲兵に對した。

「ちやこれて事は明らかになりました。誠に御面倒をかけて相済みません。」と彼等は私に陳謝した。

「どう致しまして。」と私は益々皮肉に應へた。

「この中には一人も居ないぢやないか。」

と憲兵は士民に怒鳴り始めた。

士民は最前から小哨長や森軍曹の凄まじい態度に十二分の恐れを爲して居たので、憲兵から叱られて愈々恐れ入つて居る。

「しかしだ、しかしだ。」と私はいつた。

「しかし、いかにも士民に對しては氣の毒であるから、斬首料として金五圓をこの小哨長は恵んでやらうと思ふが、君達はどうか考へるか。」

「い、え、決してそれには及びませぬ。」

と憲兵は汗を流して居る。

「君達が用事が無いからつて、餘り支那人を大切にするから、近來支那人が横着になつて、何かいふと司令部に訴へるなどと生意氣を云ふやうになつた。全體日本兵が大切か支那人が大切なのか、よく考へて御覽。豚一匹や二匹呉れたつてそれが何だ、吾々は支那の國の爲めにこんな戦争までして居るではないか。」

私は眞面目な態度に復つて彼等に説明を始めた。彼等はこれは助からぬと思つたか

「これで失禮します。」

といつて、恭しく敬禮して歸つて行つた。

小哨の全員は互ひに顔を見合はして、破顔一笑したのである。わきても森軍曹は私の今回の横着なる所爲を「男らしいやり方、愉快極まるやり方、正當なるやり方」だといつて讚めて呉れた。決して正當なるやり方だと思つて居ない私は、くすぐつたくて仕様がなかつた。けれど食物が粗悪で、少しでも部下の者が満足して勤務に服するといふことであるなら、私は其の上官として善惡共に若干の犠牲は拂つて差問

ないものと思つたのである。

部下の喜びは即ち私の喜びであつた。長い間不愉快な小隊長の下で、冷遇を受けた森軍曹にとつては、そんなことも亦愉快でたまらなかつたのであらう。私がどんな男であるか何の程度まで血氣に早やるか、其の一端がこの行爲でよく部下に了解せられた。着任してまだ十日と経たぬ間に、私と小隊とは大なる親睦を見るに至つたのである。

戦場に出て兵卒の最も忌むことは、所屬の中隊長が大隊内に於て優秀でない爲めにいつも苦勞多き任務を餘計に命ぜられることである。と共に中隊内に於て所屬の小隊長が矢張り他の小隊長に致されるといふことである。

ところが、憲兵の表面的の取調を向ふへ廻はして、白を切つた大膽(?)なる態度を見て、この勢ひなら大丈夫であると安堵したのであらう。

『この事がなア、太田だつたら一ちぢみに縮み上つて、豚を撃つた兵卒を檢舉せられ

て、どうも仕方が無いと男らしくもないことを云ふだらうよ。』
と森はあたり構はず言ひ觸らして、喜んで喜んで前途の幸福を祝ふかの如き面色であつた。

私は益々擦ぐつたくなつた。

ともかくも事件は落着した。そして不思議な無罪となつて安堵した。そして其れから小哨に出る毎に肥えた家猪は小隊全員の食膳に上つたのであるが、別に土民の愁訴もなければ憲兵の取調もなかつた。小哨勤務は随分辛らくて部下は以前にはこれを嫌つて居たが、後になるとそれを却つて喜ぶやうになつた。

森はどうした事か私が好きになつたと見えて、小哨に出たときでも中隊の位置に歸つて居る時でも、小隊長から注意を受ける迄もなく、武器の手入から新しい補充員の教育に至る迄よく氣を付けて呉れた。

かうして、戦鬪の無い静穩な若干日が續く間に私は部下の下士卒の姓名郷里に至る

までこれを覚え、中隊の他の兵卒までも知るやうになつた。これで戦争が済むものなら、私が志願して中隊附になつたのは無意味に終るのであつたが。幸にも茲に森といふ分隊長の眞の價値と、獨立任務に於ける自分の手腕を自ら知ることの出来る好機會が到來したのであつた。彼は實に驚くべき力量と勇敢とを有して居た。そして彼は涙に脆い男であつた。

六 未熟な小隊長 (其一)

貴官ハ選拔セル七十名ノ下士以下ヲ指揮シ明八日(六月)早朝出發商家臺、孤家子附近ノ敵情地形ヲ偵察シ爲シ得レハ俘虜ヲ捕ヘテ歸還スルコトヲ勉ムヘシ但シ此偵察ハ三泊以上ニ渉ルヲ許サス之ニ要スル糧食ハ即刻大行李ニ就キテ支給ヲ受クヘシ

六月七日

第三大隊長

右の命令を受けて 私は大隊本部から歸つた。選拔は他の小隊の者を要せず、私の

部下の六十七名不足の三名だけを他の小隊から仰いだ。そして夫々四日分の糧食を交付し、彈藥各自二百發其他の準備の爲め可なり多くの時間を費し、全くそれを濟ましたのは午後の八時頃であつた。

七十名を六分隊に編成し、軍曹二名伍長三名、上等兵一名を以て分隊長とし、森軍曹は第一分隊長兼右翼半小隊長と定め、石崎といふ軍曹を第二分隊長兼左翼半小隊長と定めた。しかし森は最古參であるから、小隊長不在のときには、命令なくして全小隊の指揮をすることを命じて置いた。

四日分の糧食と二百發の携帶彈藥、其他必要な物品を以て武装すれば、兵卒の負擔は可なり重いものであつた。夜遅くこれ等の検査をして床に就いたのは十二時過ぎもう八日の日は東天に紅を帯びた。

午前五時偵發小隊は中隊長を始め一同のものに送られて出發し、山又山の中を辿つて前進した。二分隊を尖兵として前分二百米に出し、私自らこれを指揮し、殘餘は

本隊として森がこれを引率した。

東大林子といふ大隊の位置から、敵の第一線即ち商家臺、孤家子附近へは約五里はある。奉天戦後私の所屬師團は東北方の山地内に滞在し、殊に私の聯隊の正面は山嶽連互して、敵と衝突することは滅多になかつた。が、今日はいよいよ敵の陣地近傍迄出て行くのであるから、多少の戦闘はこれを免れることは出来ぬと覺悟して居る。生れて初めて獨立の任務に服する、殊にこの五里の道は私の爲めにも部下の爲めにも初めてのことである。一同甚だしく緊縮して居る。而かも頃は初夏の晴天、日光は容赦なくチリ／＼と照り付け、遠近の山々は青葉の翠が滴りさう。かすかに異國の鶯の聲さへ聞えて来る、故郷の初夏がしきりに思ひ出される。

歩哨線を越えて凡そ二里ばかり行くと、一の峠がある、其處には小さな祠があつて道路の兩側には鬱蒼たる大木の枝葉が垂れ下がり誠に涼しさうな地であつた。この峠を苗嶺と稱し、我軍の騎兵斥候がよく此處で射殺されたり俘虜にされたりする所である。

る。

今私は斥候を指揮しつゝ苗嶺の手前約六百メートルの所に達した。此時さへ無事に越えたら、最早偵察隊は敵地に踏み込んだことになる。果して敵は無事に此時を通ほすであらうかと私は思ひ廻らしつゝ、依然前進を續けて行くこと約十二三メートル、突然！眞に思ひがけなく峠の森の中から四五發の銃聲が起つた。と同時に私の右側にあつた兵卒は股を撃たれて、

『あつ、やられました。』

と叫んで、其處へぶツ倒れた。血は盛んに流れ出した。

次の瞬間尖兵の部隊は道路の右側の凹所に伏臥した。負傷者の手當をし、其の間私も分隊長も峠の方をよく見たが、別に敵の影も見えない、彼等は五六發の急撃をして、日本軍の近接したことを後方に報らしたのに相違ない。

折から此銃聲を聞き付けて、本隊からは森軍曹が駆けて来て、今私が道路の中央

に起立して双眼鏡でしきりに峠を視察して居るものを、何も云はずに抱き上げて、道路の左側の地隙の中に坐らせた。

私もこれには驚いた。

『なに大丈夫だ。ロスの弾丸が乃公に中るもんか。』と私は負惜しみをいふた。

『いゝえ、危いんです。くだらんとときに怪我でもして貰つちややりきれませんよ。』と彼は云つた。

『自分がこれらあの峠に前進して、敵情を見ますから、小隊長殿はしばらく此處で待つて居て下さい。異状がなければ銃を擧げて招きますから。』

といつて、森は二名の兵をつれて、駈歩で峠の方へ前進した。若し此間に再度敵が出て射撃するやうなら、此方から掩護射撃をしてやらうと仕構へて居たが、森の姿が祠の側まで行き着くまで何の事も起らなかつた。

小哨は直ちに駈歩で前進をした。

苗嶺の峠の上に着して北方を見ると、前方は山が低く、一連の平地に近い展望が利き、遙か北方商家臺の方向は藍色の煙が立罩めて居る。此處で約十分間の休憩を行ひ、それから前進を起したが、負傷兵は幸にして軽いので、跛をひきく其處から中隊へ歸へすことにした。今や午前九時頃、いよく此處を踏み出せば敵と衝突することを豫期しなければならぬ。

七 未熟な小隊長 (其二)

苗嶺の峠を下つて、行くこと約千米其處に狗乃典子といふ小部落がある。今日日本軍が此村落に侵入するに先だち、私は其入口に於て住民の二三名を拉して来て、敵情を訊いた。その語る處によると、昨日露兵約三十名此部落並びに其近傍の小拉子、典子等の部落に來つて、牛數頭豚數十頭其他鶏などを強奪して去り、今朝五六名の露兵と馬賊二十名ばかり、此村を通過して南進したといふことである。商家臺附近の敵

情を訊いたが、其の手前西社といふ峠に露軍の歩哨が居て、一切通行を許さぬから、よく知らぬと答へた。西社は此處から約二千米の西北方に在る峠である。少くも此附近に敵が出没することだけは判断が出来る。小隊は未開の住民の奇異の歓迎をうけて無事に此村を通過した。住民は彼方此方に避難の準備をする、蓋し戦闘の始まることを恐れたのであらう。

少々豪膽なものでも、かうして敵地に進入して見るに少しも油断をしては居られぬ何時何處から敵が出て来て射撃せられるやら、又住民と思ふ者が馬賊であるやら少しもわからない。實に木の葉一枚でも疑ひの眼を以て之を見なければならぬ私の胸はしきりに騒ぐ。何となく危険が身に迫つて居るやうな感じがする。行くこと約五百米突、前方に出した斥候から、

『すぐ此の前に敵が約三十名ばかり高地から降りて來ます。』との報告を受けた。

さア、事は起こつた。考へるものは小隊の足場だ、有利な射撃陣地だ。

直ぐに東北方の小高地に私は駆け登つた。小隊は續いて其の南側に到着した。高地の絶頂に登つて前方を見渡すと、なるほど三十名ばかりの敵が馬から下りて休憩して居る。少し左方を見ると、其處は例の西社の峠と見えて寺が一軒見えるばかり、約六百米の距離に其の頂界線を見せて居る。

始めて獨立の戦闘をするわけだ。私は爲し得る限り氣を落着け、爲さねばならぬことをよく考へた。そして小隊を高地の中途で散開させ、照尺を六百米に装させ、靜かに高地の線に前進させた。これまでは平素の演習の通りやつた積りである。恰度小隊の戦闘射撃のときのやうに。

次の光景は云ふまでもなく射撃であつた。一しきり轟々と音を立て、射撃した結果、敵は一目散に北方へ退却した。後には三名の死者と七名の負傷者と三頭の馬匹とが残つて居た。しかし、事は唯これ丈けではなかつた。小隊の射撃最、私は第一分

隊長森軍曹から、ひどい目に叱られた。といふのは、小隊の散兵線の左翼即ち西社の峠の方向に戦闘斥候はどうしたか、若し其の方から敵が出て来たらどうする積りかといふのであつた。

『うむ、そりや忘れちやつたんだ。それぢや一個分隊早速出して呉れ。』
と私は命じた。實は頭がかきたかつた。

あれ丈け沈着してやつたつもりでも、肝腎な西社の峠の方向を監視する戦闘斥候を出すことを忘れるとは何の事だ。これだから経験の無い指揮官はあてにならぬ。遅れ馳せながら一分隊を派遣したが、その分隊が必要な位置に到着する迄に、この戦闘はもう済んで了つた。

敵の戦死者は其のまゝにして置いて、負傷者の中の軽傷者三名を俘虜として大隊長に送ることとした。馬三頭も亦戦利品としてこれを大隊に届けることにした。案外に獲物はあつたが精神的には私は實に未熟の小隊長であつた。老練なる分隊長に注意

せられて、辛うじて第一回の勝利は得たのである。のみならず、この戦闘で第一發を發射する迄私は餘り走り廻り過ぎて、小隊が戦闘中沈着いて敵情を見ることも出来なかつたほどだ。これが未熟者の常に陥る弊だとは後にわかつたのである。

戦闘斥候の件では大に面目を失ふて、それから小隊は西社の南方高地に辿り着き、此處で陣地を占領し、今日の行動を止めることとした。折柄正午となり日光はイリツク如く暑く、木蔭に坐つて一部は敵情を監視し、大部は晝食を爲し續いて晝眠をした。直ぐ北方の西社には敵の歩哨が居るかと思つたら、そんな影も見えず、一軒屋の寺から口髭の長い老僧が時々出たり入つたりするのが望遠鏡に映つた。

此下の谷地を出ると其處は商家臺である。けれど人跡稀なる満洲の山奥の事で、人聲一つ聞ゆるでもなく、唯油蟬の聲のみが耳に入つて居た。今敵の一人でも我等の目の前の谷地を通つて来たならば、唯一發の下に射殺されるのみの事であつた。かうして私は敵情に關して何等かの手がかりを得、そして其後の動作を定める積りであつ

た。
 高地の南麓に一家の住屋があつた。兵卒は其處へ行つて水を汲み火を焚いて茶を煮た。そして其家で今夜一大悲劇が演ぜられるとは何人も思ひも設けなかつたのである。

八 射撃の妙手

『たしかにあれは敵の歩哨だ。』

といふから、何處にそんなものがあるかと思つて、此高地から西北方約千八百米の獨立高地の巔頂に二つの黒い影法師が見える。

双眼鏡でよく見ると、果してそれは敵の監視兵であつた。

『一發やりませうか。』
 と森はいふた。

『撃つのは撃つてもよいが、千八百もあつちや命中つこないよ、やめた方がましだぜ。』

と私はいつた。

『いや、大丈夫です、一發の彈丸で一どに二人共殺すことは出来ませんけれど、たしかに一人はやつてお目にかけてませう。』
 と大きく出た。

そりや五發も六發も射撃すれば、命中することもあらうが、その中には敵が姿をか
 くす、唯一發でこれを撃留めるといふのはいふ方が餘りに自惚れて居ると誰でも思
 ふ。

『そんなら、よく見て居つて下さい、自分がやつて見せますから。』
 と森は自信あるものゝ如く、眞面目になつて、やをら小銃を樹木の根株に依托した。
 千八百米の照尺を装し、彼は稍く少時照準して居たが、最後にズドンと放し

た。

と其の刹那二人の敵の黒法師は消えた。多分彈丸が附近を嘯いて通つたので、危険だと思つて身を匿くしたのを見るのが至當だ。

『たしかに手應へがあつた。』

といひながら森は起つた。

手應へがあつてもなくても、先づ命中しない方にたしかに手應へがあつた方があつて居るやうだ。三百米でさへ中々中りはしないと人々は信を措かなかつた。

しばらくすると、例の高地上に又一人の黒法師が現はれて、何か其の身邊を探ぐつて居るやうな様子であつた。望遠鏡は其れが死體を引摺つて居るやうに映つた。それでは命中したのかなと私は思つた。

森はと見れば百が百命中したといふ面色で煙草位吹かして居る。千八百米しかも其れは敵に近い位置であるから、命中したといへば命中したとも云へるし、行つて調

べて見ることは出来ないから、彼が宜い加減なことをいつて居るのだと思へばさうも思へないことは無し。

それが實際命中して、一人の馬賊が致命傷を蒙つたのであることは、後に思ひ合はされるのである。この事あつて此馬賊の仲間が私の小隊を憎み、可なりひどい危害を以て報いんとしたことになるのであるが、この事は後に物語ることにする。

第一日の半日は勝利ある戦闘をして、夕方早く此高地を引き上げ、後方の谷合にある一軒屋に宿營することにした。此家は可なり大きな農屋であつて、鶏も豚も其他の野菜物も可なり豊富であつた。けれど、今宵一夜此家の者達の好意を得る必要があるので、明朝迄鶏などの徴發を見合せることとした。

谷は北方に通じ其の一側が小さな道路となつて居たので、一分隊を下士哨に出して警戒させ、其他は家屋の窓を開放して警急舎營をすることにした。

私は少なからぬ疲勞を感じ、且つ新しい靴を穿いて居た爲め少々靴傷を生じ、早くから横になつて寝た。けれど各分隊長殊に森分隊長は萬一のことの無いやうに、夫々手筈を定め、家の周圍に簡単な防禦設備などを施し、敵襲に際して集合すべき位置などを各分隊に指示して、萬遺憾なき迄これを完備した。さうして薄暗い一本の蠟燭の下に一同談じ合つて居たが、午後十時にもなつた頃私は一先づ起きて道路の前方に出した第三分隊の下士哨を巡察し、それから歸つて来て又床に就いた。

私の横になつた所は、長方形の室の中央で窓際の真下であつた。涼しい風が時々吹き込むので、寢心地もよく晝の疲勞を忘れるほどであつた。兵卒達は續々鼾の音を立てる、私も續いてうとうとならうとした恰も其時、すぐ頭の上の窓際から一人の大きな男が、

「大人！」

と呼んだ。

だしぬけに私を呼んだ者は、それは支那人であつた。暗いからよくはわからぬがかなり大きな男と見えて、窓際の上に肩から上が現はれる位だつた。

「なんだ、貴様は何人だッ。」

と私はこれを答めた。

「大人は其處にお寢みてすか。私はこの近傍の者ですが、どうも今夜露兵が夜襲をしに来るやうな模様があるから、これから商家臺の方へ行つて其れを見届けて、若し危ぶないことがあつたら大人にお知らせ致しませう。」

と見て来たやうな、誂へ向きのやうな、棚からぼた餅的のやうなことを言つた。

「さうか、いつて来て呉れ、褒美をやるぞ。」

と私は答へた。

しかし、妙なことであつた。

九 馬賊の眼玉 (其一)

私はしきりに胸騒ぎがする。何だか狐にでもばかされて居るやうな氣持がする。
 『小隊長殿!』と森がいつた。
 『うむ。』と私は答へた。

『今のはヒヨツとすると馬賊ですぜ。小隊長殿は其處へお寢みになつては危険です。屹度彼奴は寢首を搔きに来るだらうと自分は思ひます。』と彼はいつた。

『とにかく變なもんだ。』と他の分隊長もさういつた。

私も最前から何だか變だとは思つて居る、けれど彼奴に寢首を搔かれるやうでは、小隊長は務まらない。

『なに、寢首をさう易々と搔かれて堪まるもんぢやない。』
 と、私はこれに應へた。

『いや、とにかく小隊長殿は此方へ御寢みなさい、其處の處は自分等分隊長に任かして下さい。』と森は言ひ出した。

『そりやどうでも宜い、君子は危きに近かずか、そんならお前達の忠告に従つて寢所を變へることししよう。』

といつて私は室の一侧に移つた。

私が場所を移すと共に森を始め其他の分隊長は、非常なる興味を有つたものゝ如く俄かに色めき立つて、黍殻を抱いて来るものがある、背囊から夏外套を外すものがある、五分と經たぬ間に立派な藁人形が一人出来上つた。そして彼等はこれを今私が寢て居た場所に横はらせ、其の上に森と池田伍長と二人は、窓の兩側に身構へてもう彼奴が來さうなものだと云ふ調子に待ち構へて居る。

つまり寢首搔きの裏を搔いてやらうといふのである。
 家の周圍を警戒する歩哨には、詳しいことを語り、若し支那人が再び此家に近い

ら、咳を三つして報らせると命じた。若し窓の方で捕へ損つたら歩哨は躊躇することなく突殺すなり射殺せよといひ付けられた。萬事の手筈はこれで終つた。今は只彼の再び窓際に來るや否やに存する。

果して彼は寢首を搔きに再び來るであらうか。又は彼が言つた通り日本軍に好意を以て危険が迫つたら警報を齎らす積りであらうか。しか敵地に於ては總て敵と心得なければならぬ、日本軍に好意を寄せるだらうなどと自惚を起すことが、失敗の抑々の原因となるのである。

されば寢首搔きと見るのが一番安全だ。

手筈はさまつて居る、御苦勞なことに二人の分隊長は窓際の兩側にしやがんで獲物の來るのを待ち構へて居る。一同の者は好奇心に驅られて寢た風りをして居る。何か雲を掴んだやうなことだが、この位に細心の注意をして居れば敵に致されることもあるまゝ。

夜は次第／＼に更けて行く四邊は益々静かになる、杳かに山鳴の音と時々遠方で起る犬の吠聲より他に耳に觸るるものは無い。待てども待てども獲物の來さうな様子も無いので、張りつんだ氣も弛み、私を始め兵卒の多くはいつかはなしにうご／＼と白河夜舟を漕ぐやうになつた、夜は早くも十二時に近くなつた。いよ／＼牙え渡つた夜半の静けさは、一しほ人々の鼾の音を高く聞えさせた。斯かる裡にも二人の分隊長は氣を張りつめ、的もなきことを飽かず待ち設けて居る。

十二時は過ぎてもう一時近くにもならうかと思ふ頃、實に不思議なことには、歩哨は三回の咳をした。これで私の眼も冴えた。と思ふ間もなく、例の窓際に當つて人の氣勢がする、暗い家の中から瞳を凝らして外を見ると、黒い頭が今や其の窓の外から、ちつと内の様子を窺つて居るらしい様子。

『さよ／＼來たなッ。』

と私は冷汗が出るほど驚いた。

戸外の黒法師は極めて注意深き速度を以て窓に近づき、其の頭は次第に肩を現はし、次いで乳のあたりまで現はして來た。それを室の内から見て居る者は三人や四人でないことには彼奴は氣が付かぬらしい、それが彼奴の運の盡きとでもいふものか。

彼奴はいよ／＼目的を達したりと思つたか、矢庭に窓に乗り上つて、大きな長い手を一振り振つたと思ふと、

『イヤッ、こん畜生ッ。』

と怒鳴つた森と今一人の分隊長の掛聲とに、此場面は混亂した。

次の一分間には、彼奴は引摺り上げられて、四五人の者から後手に振ち上げられ、其處に組み伏せられて、

『うん／＼。』と苦しうな唸りを立て、居た。

『やつたかッ。』

と私は叫んだ。

『やりました。さア、来て下さい。』

と森は云つた。

恰も鼠係蹄を作つて、夜中に鼠のかゝるのを待つて、バチンと係蹄が落ちた音を聞いたときのやうな心持だつた。さう／＼想像は事實となつて現はれ、私が駈け付けたときには彼奴は鼻血だらけになつて、振ち倒ふされ、繩を以てグル／＼巻き付けられる處であつた。

蠟燭を點して彼を見たとき、私の目に第一に映じたものは、彼奴の恐ろしく光る眼光であつた。其處に彼の手からは露軍歩兵用の三角銃劍が投げ出されてあつた。彼奴はこれを逆手に持つて藁人形の胸先目蒐けて突き刺した、これが日本大人だと思つて………。そして其の延びた手を森と今一人の分隊長に掴まれて、窓から引摺り込まれ、何の苦もなく振ち伏せられたのである。

藁人形を突刺したことがわかつたとき、彼奴は「しまった」と思つたかどうか。とにかく計略は巧みに適中し、今吾々は目前に面構の悍悪な眼光のキラ／＼する一馬賊を引据ゑて、舌を巻いて驚いて居る。

「これだから油断もこくもなりやせぬ。」

と森は汗を拭き／＼笑つて居る。

「随分力の強い奴だ。」

と他の分隊長も額の汗を拭つた。

一〇 馬賊の眼玉 (其二)

彼奴の目ざしたのは私の首だつた。けれど巧みに裏を搔かれて、反對に彼奴はもう首を失はなければならぬ。若しも彼にして私の首を取り得たならば、彼は露軍から相當の褒美を貰つたことであらう。實に險呑なことだつた。

こんなことで、生命を失つたら……と思ふと私は未だに冷汗が止まなかつた。

「森ッ、それをどうしてやらう、お前に好い考へがあるか。」

と私は問ふた。

「これを自分に下さい。明朝ねち殺しますから。」と森はいつた。

「とにかく生かしては置けない。」

と私も同意した。

そこで、縛つた儘これを家の前の樹木に括り付け、歩の監視の下に置いて、一同は寝ることにした。夜はこのどさくさに紛れていつしか明けかけた。

私は直ちに彼を死刑に處する判決をした。そして、家の庭に引き据ゑてある彼に其の旨を宣告した。

存外平氣に彼はそれを聞いた。

「どうして殺すか、射撃して殺すのが一番よいが、それでは敵に我小隊の存在を知ら

れる虞れがあるから、斬り殺すことがよからう。』
と私はいった。

『それよりか、撲り殺しちやどうです。最後の刺留はあの牛蒡剣ですればいゝてせう。』

と森が發案した。

『キア／＼泣かれると蒼蠅いから、一思ひに殺してやれ。』と私はいった。

彼の眼の玉は實際凄まじく恐ろしく光つて居た、そして今間もなく殺されるといふ昂奮の爲めに血走つて居た。こんな奴に訊問もいらなければ哀れみも必要ではない。彼奴等は人間の生命を何とも考へて居らぬ代りに、彼奴の生命も虫けら同様に取扱つて差支ないものである。けれど殺すなら苦痛を見せずに。

兵卒は其の脇に穴を掘つた、云ふまでもなく彼奴の死體を埋ける爲めである。まだ死にもせぬ人間の傍で塚穴を掘るなどは戦場でなければ見られぬ光景である。

いよ／＼死刑執行となつて、森軍曹は彼の罪を數へいよ／＼最期を言ひ渡して、撲殺はやめ、銃剣で突き殺すことにした。躊躇なく身構へた軍曹は『ヤッ』と掛聲すると共に、銃剣の切尖は胸から徹つて背中に抜け通つた。血は迷る、見る／＼裡に彼奴の顔は蒼黒くなり、光つた眼光は曇り、白くなり、三分も経たぬ間に息は絶えた。

間もなく死體は穴の中に投げ込まれて、埋められて了つた。私はどうした事か一種の可哀想の念が湧いたが、今となつて彼奴を助けることは云ひ得なかつた。

恐ろしい眼玉の持主は露軍の間諜で、これまで我軍の騎兵斥候が、不慮の災禍に遭ふたのも皆此種類に屬するものであつた。幸にして老練なる分隊長の計略により、危難を危れたばかりでなく、危険なる馬賊を殺し得たのは我軍の至幸とする所であつたのである。

誰も當夜に於ける兩分隊長の豪膽なる行動を敬服せぬものはなかつた。思慮に富み而かも大膽であることは實に模範的であつた。幸にして其の晩は敵襲もなく、小隊

は此處を引上げて西北方に前進し、孤家子といふ村落の近くの高地に取りつき、此處から斥候を以て商家臺及孤家子附近の敵情及地形を偵察することにした。

茲に昨日千八百米の照尺を以て射撃した例の高地が直ぐ後方にあつた。實際昨日の一發の射撃が命中したかどうかを見る爲め森軍曹は二三の兵卒を伴ふてその高地に行つた。其處に血しほは流れ、露兵の軍帽一つと手拭一枚どが血に染まつて遺されてあつた。

たしかに一名に命中したこととなつた。私も他の下士兵もこれを聞いて森の射撃の妙手には一驚を喫したのである、彼は決して間違ひは云はなかつたのである。

一一 退却中の事件

此高地に到着してから凡そ二時間の後の事であつた。商家臺方向へ出した斥候は息をせか／＼いせながら歸つて来て、

「只今商家臺方向から約二百名の敵の歩兵が此高地の方向へ前進して居ります。」と報告した。

それから三分と経たぬ間に孤家子に停止斥候から、

「孤家子は敵の歩兵約百の爲めに占領せられました。」といつて来た。

孤家子は此地から約九百米であつて、商家臺は約二千米突を隔て居る。若しも両方面から攻撃されるやうな事があつたならば、小隊は退却の道路を失ひ、残らず捕虜となるか戦死するかの外なき情況だつたので、私は直ちに小隊を率ゐて眞直に南方に退却することにした。しかし、今や商家臺方向から来た敵は、西社の峠近くに進んで居る筈であるから、多少の戦闘は免れることが出来ない。

私は一個分隊を左翼に出し左側衛の形にして退却しようと思つたが、さてどの分隊を此困難な任務に充てようかに當惑した。そこでこれを森軍曹に謀つたところが、

「それは自分の分隊が引き受けませう、」

といつた。

優勢の敵を控へて而かも危険な側面を退却しようといふとき、何人だつて僅かな兵を率ゐて犠牲的の任務には就きたくない。拙い動作をすれば此分隊は全滅しなければならぬ。何故かならば、敵は昨日來馬賊の間諜殊に今朝死刑に處したる馬賊から、日本偵察隊の兵數も知り其の概略の位置もよく知つて居る筈だからである。

申述べることが遅れたが、昨日西社東南方に於て捕獲したる三頭の馬匹と、三名の輕傷俘虜とは、狗乃典子部落で支那人の人夫を傭ひ、小隊の兵二名を護衛として大林子の前哨本隊へ送り還へしたのである。出發するときには小隊長と共に七十一名の小隊が、其の前の一名の我負傷者と今朝報告の爲め歸へらせた兵卒二名とで都合五名を減じ、今や小隊は六十五名の下士卒である。

かういふ偵察隊の最も大切なことは、極めて運動の輕快なることである。従つて戰鬥などをして戦死者や負傷者を出すと、直ぐさま運動性に關係を及ぼすこととなるか

ら、出来ることなら戰鬥を避ける必要がある。

今此高地でまご／＼して居ると、遂には西北方から孤家子の約百名の敵までやつて來ることになり、約五倍の敵から包圍せられて全滅の悲運を招くことになるかも知れない。されば一刻も速やかに南方に退却する必要があるが、さて一本の退却路それに依るときは、敵はどうしても我左翼に近く到着することになる。それを拒ぎ留めて置いて無事に通過しようといふのであるが、その困難なる任務に森が進んであたらずといひ出したのである。

『御苦勞ではあるが、お前に頼まう、よろしくやつて呉れ、そして餘り深入りをしない裡に退却するが良い、苗嶺の峠で必ず待つて居るから。』

と私は急いでこれ丈けのことをいつた。私の言葉が終るが早い第一分隊は駆歩で出發し、商家臺方向に前進した。

私は大急ぎで殘餘の小隊全部を引き纏め、駆歩を以て退却に就いたが、昨日の高地